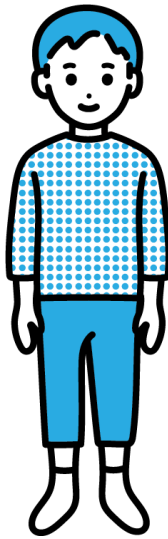


富田林市新堂小学校区・大伴小学校区 こども食堂 アンケート・インタビュー調査報告書



休眠預金を活用した事業です

調査期間： 2025年12月～2026年1月

発行： とんだばやしみんなの居場所づくり応援隊

制作： 大阪大谷大学 人間社会学部 人間社会学科 王地裕介

目次

第1章 こども食堂の現状とその広がり	1
1-1. こども食堂とは何か	1
1-2. こども食堂が広がった社会的背景	1
1-3. こども食堂が果たしている多様な役割	2
1-4. こども食堂の運営体制と直面する課題	2
1-5. 本調査の目的と位置づけ	3
第2章 調査の概要と方法	4
2-1. 利用者アンケートの設計と実施	4
2-2. ボランティアアンケートの設計と実施	6
2-3. 高学年児童を対象とした「こども食堂のイメージ」に関するアンケート調査	9
2-4. こども食堂運営者へのインタビュー調査の設計と実施	11
第3章 アンケート調査の結果	15
3-1. 利用者アンケートの調査結果	15
3-2. ボランティアアンケートの調査結果	22
3-3. 高学年児童を対象とした「こども食堂のイメージ」に関するアンケート調査結果	30
第4章 インタビュー調査の結果	40
4-1. はっぴい食堂	40
4-2. こども食堂そこに愛はあるんか	42
4-3. なの花食堂.	44
4-4. ほっとスペースとんだばやし	46
4-5. おかえり食堂	48
4-6. おおとも食堂.	50
第5章 おわりに	53
(付録) アンケート調査の自由回答の抜粋	55

第1章 こども食堂の現状とその広がり

1-1. こども食堂とは何か

こども食堂とは、地域の住民やボランティア、NPO 法人、社会福祉法人などが主体となり、こどもを中心に、誰でも利用できる食事の場を提供する取り組みである。多くの場合、無料または数百円程度の低額で温かい食事が提供され、こどもだけでなく、その保護者や高齢者、地域住民など、さまざまな立場の人が集うことができる。

重要な点として、こども食堂は国の制度や法律に基づいて設置されている施設ではない。そのため、明確な定義や統一された運営基準は存在せず、それぞれの地域や運営団体の考え方、利用者のニーズに応じて、柔軟な形で運営されている。この「自由度の高さ」こそが、こども食堂の大きな特徴であり、同時に強みでもある。

開催頻度を見ても、月に1回程度の開催にとどまるものもあれば、週に1回、あるいは平日の放課後に継続的に開かれているものもある。開催場所についても、公民館や地域の集会所、学校の空き教室、飲食店の一角、寺社、個人宅など多様であり、その地域にある資源を活かした形で実施されている。

こども食堂という名称から、「経済的に困難な家庭のこどもが利用する場所」というイメージを持たれることも多い。しかし実際には、利用対象を限定せず、「誰でも来てよい」「地域の人なら歓迎する」という方針を掲げる食堂が多い。この開放性が、特定のこどもが「支援を受けている存在」として目立つことを防ぎ、自然な形でこどもたちを受け入れる仕組みとなっている。

1-2. こども食堂が広がった社会的背景

こども食堂が全国各地に広がるようになった背景には、現代社会が抱える複数の課題が関係している。

第一に挙げられるのが、こどもを取り巻く家庭環境の変化である。共働き世帯の増加や、ひとり親世帯の増加により、保護者が仕事や家事に追われ、こどもと向き合う時間を十分に確保することが難しくなっている。夕食の時間帯に保護者が不在となり、こどもが一人で食事をする「孤食」の状況が日常化している家庭も少なくない。食事は単に空腹を満たす行為ではなく、人と人が関わり、生活リズムや社会性を身につける重要な時間である。その機会が減少していることは、こどもの心身の成長や生活習慣にも影響を及ぼすと考えられている。

第二に、経済的な困難を抱える世帯の存在である。すべての家庭が十分な食事を安定的に確保できているわけではなく、食費を抑えざるを得ない状況にある家庭も存在する。特に成長期にある子どもにとって、栄養バランスのとれた食事を継続的にとることは重要であり、その機会を地域で補完する役割として、こども食堂が注目されてきた。

第三に、地域社会のつながりの希薄化がある。かつては近隣住民同士が顔見知りであり、こどもを地域全体で見守る関係が存在していた。しかし、都市化や居住形態の変化により、隣に住んでいる人の顔や名前を知らないという状況も珍しくなくなっている。

こうしたなかで、こども食堂は「食事」という日常的で参加しやすい行為を通じて、人と人を再びつなぐ場として機能し始めた。特別な支援活動としてではなく、自然に人が集まり、関係が生まれる場所として受け入れられてきたことが、急速な広がりにつながったといえる。

1-3. こども食堂が果たしている多様な役割

こども食堂は、食事提供を出発点としながら、実際には多面的な役割を果たしている。まず、こどもにとっての「安心できる居場所」としての役割である。学校や家庭とは異なる空間で、ありのままの自分でいられる場所は、こどもにとって大きな意味を持つ。運営者やボランティアとの日常的な会話のなかで、こどもが学校での出来事や悩みを自然に話すこともある。

また、保護者にとっての支援の場としての側面も重要である。食事づくりの負担が軽減されるだけでなく、他の保護者やスタッフと話すなかで、子育ての悩みを共有したり、情報交換を行ったりする機会が生まれている。特に、孤立しがちなひとり親世帯にとって、気軽に立ち寄れる場所の存在は心理的な支えとなっている。

さらに、高齢者や地域住民が関わることで、多世代交流の場としても機能している。料理を通じて培われた知恵や経験が次世代に伝えられるだけでなく、こどもとの交流が高齢者の生きがいや社会参加につながるケースも見られる。

このように、こども食堂は「支援する側」「支援される側」という一方向の関係ではなく、地域の中で役割を持ち合う関係を生み出す場として存在している。

1-4. こども食堂の運営体制と直面する課題

こども食堂の運営は、多くの場合、運営者やボランティアの自主的な活動によって支えられている。調理や配膳、こどもの見守り、会場設営、片付け、広報活動など、さまざまな作業が必要であり、その多くが無償の協力によって成り立っている。

運営資金についても、寄付金や助成金、自治体からの補助、企業や個人からの食材提供など、複数の資源を組み合わせることで運営されているケースが多い。一方で、助成金は期間が限定されていることが多く、長期的な運営の安定性を確保することは容易ではない。

また、運営者個人に負担が集中しやすい点も課題として挙げられる。活動への思いが強いがゆえに、無理を重ねてしまい、継続が困難になるケースもある。こども食堂を一過性の取り組みで終わらせず、地域に根づいた活動として続けていくためには、運営体制の工夫や、周囲からの理解と協力が欠かせない。

1-5. 本調査の目的と位置づけ

このように、こども食堂は全国的に広がり、地域ごとに多様な形で展開されている一方、その実態や課題は一様ではない。表面的な数や事例だけでは、現場で何が起きているのかを十分に理解することは難しい。

そこで、この調査は休眠預金活用事業「人をつなげ支え合う持続可能な富田林市こども食堂・居場所づくりトータルコーディネート事業」の一環として、その事業成果を確認するために実施した。本来、富田林市内のすべてのこども食堂を対象に実施すべき調査だが、時間的な制約等により、富田林市内で最も多くのこども食堂が運営されている新堂小学校区のこども食堂4か所とまったくこども食堂が存在しなかった小学校区でこの事業期間中に新たに開設された大伴小学校区のこども食堂1か所、計5か所をモデルとして抽出し調査を行った。

調査では、こども食堂利用者、ボランティアを対象にしたアンケート調査と同時にこども食堂の主な対象者である各小学校区の高学年(4・5・6年生)に対する全数調査アンケートを行った。また、各こども食堂の運営者に対面でヒアリング調査(Zoom 利用)を実施した。

この事業では、「富田林市のどこでも身近なところでこども食堂や居場所が運営されており、それぞれがつながっている」ことを中長期的な目標として掲げており、この調査では、こども食堂がどのように設立され運営されているかを明らかにし、利用者、ボランティア、地域にどのように受け止められており、つながっているかを明らかにすることを目的としている。

次章以降では、調査方法の概要を示したうえで、利用者・ボランティア・運営者それぞれの視点から、こども食堂の現状と課題を具体的に検討していく。

第2章 調査の概要と方法

2-1. 利用者アンケートの設計と実施

本調査では、こども食堂を実際に利用しているこどもを対象にアンケート調査を実施した。その目的は、利用者(主にこどもたち)の背景や利用実態、こども食堂の利用によってどのような変化や気づきがあったのかを把握することである。アンケートは、こどもでも答えやすく、かつ調査目的に即したデータが得られるように設計された。内容は多くの質問形式が選択肢形式(複数回答可のものも含む)で構成され、回答者の負担を軽減しつつ、幅広い情報を得られるよう工夫している。

この章では、実施したアンケートの各質問が意図する内容と、その設計における工夫について説明する。

なお、アンケートの実施にあたっては、Google フォームを用いて実施するとともに同様の内容を紙媒体に印刷を行い、回答者が自身のペースで答えられる形式とした。質問項目は、選択式を中心としながら、一部に自由記述欄を設け、定量的な把握と定性的な意見の収集の両立を図っている。回答者によっては、まだ QR コードを読み込めるスマートフォンを持っていない可能性もあるため、この形式で実施を行った。

2-1-1. 基本属性と利用状況

アンケートはまず、こどもの基本的な属性と利用実態を把握する質問から構成されている。具体的には、以下の項目を設定した。

- **学年**:こども食堂利用者がどの年齢層かを把握するためである。学年情報により、利用パターンや感じ方の違いを年代別に分析できるようにしている。
- **性別**:性別による利用傾向の差異を検討する際に用いることができる。
- **居住地区**:地域の小学校区内か外かを問うことで、地元のこどもがどの程度参加しているかを確認する。居住地情報は、地域への通いやすさや参加の動機を考えるうえで重要な指標となる。

続いて、こども食堂の利用期間や頻度に関する質問を設けた。これは、利用歴の長さや頻度によってこどもたちの感じ方や行動がどのように変化しているかを検討するためである。「今回が初めて来た」「1学期から来ている」といった選択肢により、学期や年をまたいだ変化を見る際に用いることが可能になる。

また、「どれくらいの頻度で来ているか」、「一人で来ることが多いか、誰かと一緒か」といった質問は、参加の仕方や社会的な関わり方を把握する上でも有効である。これらの設問により、こども

食堂が単純な食事提供の場であるのか、友達や家族との交流の機会としても機能しているのかについて分析ができるようにしている。

2-1-2. 利用動機と体験

次に、こども食堂を利用するようになった動機について尋ねる質問を設けた。選択肢には複数回答が可能な項目を設定し、こどもたちがどのような理由で来ているかを多角的に捉えられるようにしている。選択肢には、「大人が家にいないから」「友達と遊べるから」「ご飯が誰かと一緒に食べられるから」「食事が美味しいから」「ボランティアの人と会えるから」などが含まれており、単純な空腹を満たすためだけではなく、居場所としての価値や社会的なつながりを求める意識があるかどうかを判別できるようにしている。

さらに、利用による変化についての質問では、遊ぶ友達の増加や、さみしさを感じる時間の減少、地域の大人と知り合いになったといった選択肢を用意した。これにより、こども食堂への参加が単なる体験以上の影響を与えているかどうかを測ることができる。

2-1-3. 人間関係と交流

こども食堂が提供するもう一つの重要な機能として、人と人との関係性の形成がある。そこで、こども同士やボランティアとの関わりの程度を尋ねる設問を設けた。

質問例として、「こども食堂で周りの友達とどれくらい話したり遊んだりするか」「ボランティアの人とはどれくらい関わるか」といった質問を行った。これらは、こどもたちがこども食堂の中でどれだけ積極的に交流しているのかを測る指標となる。

また、「学校では遊ばないけれどこども食堂では遊ぶ友達がいるか」といった質問も含んでおり、学校という場とは異なるタイプのコミュニケーションが発生しているかを把握する意図がある。こども食堂固有の「つながり」がどのような形で現れているのかを分析するうえで、このような質問は有用であると考えた。

2-1-4. 利用者の評価と改善点

アンケートは、こどもたち自身がこども食堂についてどのように感じているかを把握する設問も含んでいる。「こども食堂のどんなところが良いと思うか」という項目では、友達と遊べる、ご飯が食べられる、誰かと一緒にいられるなど、多様な価値を選択肢として提示した。これにより、こども食堂がどのような魅力を持って受け入れられているかを明らかにすることができる。

一方で、「困っていることは何か」「今のこども食堂をどんな場所にしたいか」という自由回答や選択肢による質問も設定している。これによって、こどもたちの視点から見た改善点や、運営側が気づきにくい不満や要望を拾い上げることが可能となる。

2-1-5. 設問設計における工夫

今回のアンケート設計にあたっては、以下の点を主に意識した。

- **回答のしやすさ**
こどもが主体となる調査であるため、質問文をわかりやすく簡潔にし、選択肢形式を多く取り入れた。特に、回答者が小学校低学年であることも想定されたため、難解な漢字の表記は控えた。また、こどもの視点に立って答えやすい表現を工夫した。
- **客観性と多様性の確保**
選択肢は包括的かつ重複回答ができる形式を導入し、こどもたちが持つ複数の動機や体験を捉えられるようにした。
- **交流の実態把握**
単純な参加頻度だけでなく、他者との関わり方や感じている価値についても設問に含めることで、こども食堂での体験を測定できるようにした。

こうして設計されたアンケートは、こども食堂の利用者がどのような背景を持ち、どのように感じ、どのような影響を受けているかを総合的に理解するための有力なデータを提供すると思われる。

2-2. ボランティアアンケートの設計と実施

本調査では、こども食堂の活動を支えているボランティアを対象にアンケート調査を実施した。こども食堂の継続的な運営は、ボランティア一人ひとりの関わりによって成り立っており、その実態や思いを把握することは、活動の現状と課題を理解するうえで欠かせない。

そこで、本アンケートの目的は、ボランティアがどのような背景や動機を持って参加しているのか、活動の中でどのような役割を担い、どのようなやりがいや負担を感じているのかを明らかにすることである。あわせて、今後の活動をより良いものにしていくための改善点や工夫について、ボランティア自身の視点から把握することを目的としている。

アンケートの実施にあたっては上記の利用者アンケートと同様に、Google フォームと紙媒体から回答者の希望に合わせて選択できる形式とした。特にボランティアスタッフの中には、年齢や使用の慣れの問題から Google フォームでの回答が困難であるかもしれないという事前情報を得ており、この形式を採用している。

2-2-1. ボランティアの基本属性と関わり方

アンケートの冒頭では、ボランティアの基本的な属性と、こども食堂への関わり方について尋ねている。具体的には、年齢層や居住地域、参加年数などを把握するための設問を設定した。

これらの質問は、どのような人々がこども食堂の活動を支えているのかを把握するための基礎的な情報である。参加年数については、「参加し始めて間もない人」と「長期間関わっている人」との間で、感じ方や課題意識に違いがある可能性を考慮し、分析に活用できるようにしている。

また、「どのくらいの頻度で参加しているか」「どのような形で関わっているか」といった設問を設けることで、ボランティアの役割の多様性や関与の度合いを把握できるようにした。これにより、こども食堂がどのような人材によって、どのような分担のもとに成り立っているのか、そして関わり方の違いから出てくる意見に相違があるのかといったことを明らかにすることができる。

2-2-2. 参加のきっかけと動機

次に、こども食堂のボランティアに参加するようになったきっかけや動機について尋ねる質問を設けた。この設問では複数回答を可能とし、一人ひとりの参加理由が単一ではないことを前提とした設計としている。

選択肢には、「地域の役に立ちたいと思ったから」「こどもと関わる活動がしたかったから」「知人に誘われたから」「時間に余裕ができたから」など、比較的答えやすく、かつ多様な動機を網羅できる内容を含めている。これにより、利他的な動機だけでなく、個人的な関心や生活状況の変化といった側面も含めて把握することができる。

このような質問を設けた背景には、ボランティア活動が「強い使命感」だけで支えられているわけではなく、活動を通じての自己研鑽^{けんさん}や得られるであろうメリットをどのように感じているのかを明らかにしたいという意図がある。これは、今後こども食堂を支えていく上で必須となるボランティアの募集を行う上で、非常に重要な事項であると考えられる。

2-2-3. やりがいと負担感

ボランティア活動には、やりがいと同時に、少なからず負担も伴う。そのため、本アンケートでは、活動を通じて感じているやりがいと大変さの両方について質問を設けている。やりがいに関する設問では、「こどもたちの笑顔が見られる」「地域とのつながりを感じられる」「自分自身の学びや気づきがある」といった項目を提示し、活動が個人にとってどのような意味を持っているのかを把握できるようにした。

一方で、「体力的な負担」「時間的な制約」「人手不足」「役割が偏っていると感じる」といった項目を通じて、活動を続けるうえでの課題や負担感についても尋ねている。このように、肯定的な側面と否定的な側面の双方を同時に捉えることで、実態に即した理解をめざした。

2-2-4. 交流やつながり

「こども食堂に来るこどもたちとの交流は十分にあると感じるか」について尋ねた設問は、ボランティアがこどもとどの程度関わりを持っていてと認識しているかを把握することを目的としている。また、「他のボランティアスタッフとのつながりを感じられるか」について尋ねた。こども食堂の運営は、個人の善意だけでなく、複数のボランティア同士の協力関係によって成り立っていることが多い。そのため、ボランティア間のつながりや一体感の有無を把握することは、運営体制の安定性や継続性を検討する上で重要である。

加えて、ボランティア先のこども食堂が福祉などの支援機関や地域とつながっていると思うかを尋ねた。この設問は、こども食堂が地域の中でどの程度、制度的・専門的支援と結びついていると認識されているかを把握することを意図している。さらに、こども食堂は、地域住民や学校、団体などとの関係性の中で成立している活動であり、地域とのつながりの強さは活動の広がりや持続可能性に大きく関わる。実際の連携の有無そのものではなく、「ボランティア自身がどのように認識しているか」に着目することで、現場レベルで共有されている情報や理解の程度を明らかにすることを目的とした。

これらの設問はいずれも、事実関係を直接問うのではなく、ボランティア自身の「感じ方」や「認識」に焦点を当てている点に特徴がある。これは、こども食堂の活動が公式な制度や文書だけでなく、現場の関係性や雰囲気によって支えられている側面が大きいと考えられるためである。

2-2-5. 今後の継続意向と改善点

さらに、今後もこども食堂の活動に関わりたいかどうか、また、より参加しやすくするために必要だと感じていることについても質問を設けた。「ボランティア先のこども食堂について、どのように改善できると思うか」を自由記述で尋ねる設問は、あらかじめ選択肢を設定せず、回答者が自身の経験や問題意識に基づいて自由に意見を記述できる形式とした点に特徴がある。これにより、運営面、活動内容、環境整備、参加体制、地域との関係性など、ボランティアが現場で感じている多様な改善点を幅広く把握することを意図した。

また、「ボランティア活動を今後も継続したいと思うか」について尋ねた設問は、こども食堂の持続可能性を検討する上で、ボランティアの継続意向が極めて重要な要素であるとの認識に基づいて設定したものである。選択肢は、「全く思わない」「少しそう思う」「とてもそう思う」の三段階とし、活動継続に対する意欲の強弱を把握できるよう設定している。あえて「どちらともいえない」といった中立的な選択肢を設けず、段階的な肯定・否定の選択肢に限定したのは、ボランティア自身が現在の活動をどのように評価しているのかをより明確に把握するためである。この設計により、こども食堂の活動環境や支援体制が、ボランティアの継続意欲にどのように影響しているかを分析するための基礎的な情報を得ることが可能となる。

これらの設問は、ボランティアの定着や活動の持続可能性を考えるうえで重要である。自由記述欄を設けることで、選択肢では拾いきれない具体的な意見や提案を記述できるようにし、現場の声をそのまま反映できるよう工夫している。

2-2-6. 設問設計における工夫

ボランティア向けアンケートの設計にあたっては、以下の点を重視した。

- **回答しやすさへの配慮**
活動後の限られた時間でも回答できるよう、質問数や表現を簡潔にし、選択式を中心とした。
- **否定的な回答もしやすい設計**
活動の大変さや課題についても率直に答えられるよう、表現に配慮し、否定的な選択肢もあらかじめ用意した。
- **活動の価値を多面的に捉える視点**
単なる労力提供としてではなく、個人の経験や学び、地域との関係性といった側面も把握できるようにした。
- **改善点を問う姿勢**
改善点を問う際には否定的な表現を避け、「どのように改善できると思うか」という前向きな言い回しを用いた。これにより、運営への批判を強調するのではなく、建設的な提案として意見を引き出しやすくなるよう配慮している。

このような設計によって、本アンケートは、こども食堂を支えるボランティアの実像を多角的に捉えるための基礎資料となっている。

2-3. 高学年児童を対象とした「こども食堂のイメージ」に関するアンケート調査

本調査では、こども食堂の利用者や運営に関わる人々の声を把握するだけでなく、地域に住むこどもたちがこども食堂をどのように捉えているのかを明らかにすることも重視した。そこで、調査地区である新堂小学校および大伴小学校に所属する高学年の児童を対象に、こども食堂に対するイメージや認識を尋ねるアンケート調査を実施した。

この調査の目的は、こども食堂を「利用しているこども」の視点だけでなく、同じ地域で生活しているが、必ずしも参加経験のないこどもたちが、こども食堂をどのような場所として理解しているのかを把握することである。こうしたイメージや先入観は、参加のしやすさや利用の広がりを考えるうえで重要な要素となる。

こども食堂の実際の利用者だけでなく、これまで利用経験のない児童・生徒も含めて、こども食堂に対する認知やイメージ、利用に至らない理由、今後の利用意向を把握することを目的として、

利用経験の有無に応じた分岐型の設問を設定した。これにより、既存の利用者像だけでなく、潜在的な利用者層の意識や障壁を明らかにすることを意図した。

アンケートは、学校の協力を得ることで、Google フォームを用いて実施し、学校現場でも回答しやすいよう、質問文や選択肢の表現に配慮した構成とした。

2-3-1. 基本属性と認知・参加状況

アンケートの冒頭では、学年や学校区といった基本的な属性を確認するとともに、こども食堂という言葉や活動を知っているかどうかについて尋ねている。

この設問は、こども食堂が地域のこどもたちにどの程度認知されているのかを把握するためのものである。さらには、当該地域にある具体的なこども食堂を列挙し、知っているかどうかや実際に行ったことがあるのかを尋ねることで、回答者の認知状況や参加状況の把握の理解に努めた。

特に「これまでに行ったことのあるこども食堂」について、複数回答形式で尋ねた。本設問は、調査地区および周辺地域に存在する複数のこども食堂の認知状況や利用の広がりを把握することを目的としている。単一のこども食堂のみを対象とするのではなく、具体的な名称を提示することで、回答者が自身の経験を思い出しやすくなるよう配慮した。また、複数回答とすることで、複数のこども食堂を利用しているケースも把握でき、地域内におけるこども食堂同士の重なりや回遊的利用の実態を捉えることが可能となる。

2-3-2. こども食堂に対するイメージと参加しない理由

こども食堂に「行ったことがない人」を対象とした設問もあり、例えば、こども食堂に行ったことがない児童・生徒が抱いているイメージについて尋ねた。選択肢には、「楽しそう」「美味しいものが食べられそう」といった肯定的なイメージだけでなく、「勉強をしろと言われそう」「知らない人と話をさせられそう」「何も変わらなさそう」といった否定的・不安要素を含む項目もあえて盛り込んだ。これにより、表面的な好意的印象だけでなく、利用をためらわせる心理的要因を把握できるよう工夫している。

そして、こども食堂が「楽しい居場所」として認識されているのか、または「特別な事情のあるこどもが行く場所」として捉えられているのかを把握することができる。利用経験の有無にかかわらず、地域のこどもたちがどのような印象を持っているのかを明らかにするための重要な設問である。

次に、こども食堂に行ったことがない理由について、複数回答形式で尋ねた。本設問は、経済的理由に限定されがちな従来の理解を超え、情報不足、立地、時間帯、人間関係への不安、周囲の目といった多様な要因を明らかにすることを意図している。選択肢を具体的かつ生活実感に即した表現とすることで、回答者が自身の状況に照らして選びやすい設計とした。

さらに、今後の利用意向について単一選択で尋ねた。ここでは、「全く行きたいとは思わない」から「とても行きたいと思う」までの段階的な選択肢を設定し、利用経験のない児童・生徒がこども食堂に対してどの程度前向きな関心を持っているかを把握することを目的とした。この設問により、潜在的な利用可能層の存在や、情報提供や環境整備によって利用につながる可能性を検討するための基礎的資料を得ることができる。

2-3-3. こどもの居場所

アンケートではさらに、こども食堂に限らず、児童・生徒が放課後や週末にどのような場所で時間を過ごしているのか、また、どのような場所があればよいと考えているのかを把握することを目的とした。これらの設問は、こども食堂を個別の施策として捉えるのではなく、地域における「こどもの居場所」全体の中で位置づけるために設定したものである。複数回答形式とすることで、単一の居場所に限定されない、実際の生活行動の多様性を捉えられるよう配慮した。

以上の設問群により、本調査では、こども食堂の利用実態だけでなく、利用に至っていない背景や、こどもたちが地域に求めている居場所のあり方を多角的に把握することを可能とした。これらの結果は、今後のこども食堂の周知方法や運営改善、地域における居場所づくりを検討する上で、重要な基礎資料となると考えられる。

2-3-4. 設問設計における工夫

本アンケートの設計にあたっては、以下の点を特に意識した。

- **評価や正解を求めない質問構成**
こどもが「こう答えなければならない」と感じないよう、イメージや印象をそのまま答えられる設問とした。
- **否定的な印象も表出できる選択肢**
行きにくさや不安といった感情も自然に表現できるよう、あらかじめ選択肢に含めた。
- **利用者調査との比較が可能な設計**
利用者アンケートで把握した実態と、地域のこどもたちのイメージとの差を比較できるよう、共通点を意識した設問構成とした。

このように、本アンケートは、こども食堂の「実際の姿」と「地域のこどもたちが抱くイメージ」との間にあるギャップを明らかにするための重要な調査として位置づけられる。

2-4. こども食堂運営者へのインタビュー調査の設計と実施

本調査では、アンケート調査によって利用者やボランティア、地域の子どもたちの声を幅広く把握するだけでなく、子ども食堂の運営を担う立場からの視点を深く理解することを目的として、運営者へのインタビュー調査を実施した。

子ども食堂の活動は、運営者の問題意識や価値観、地域との関係性に大きく左右される。そのため、数値データだけでは捉えきれない背景や意図、試行錯誤の過程を明らかにする必要があると考え、本調査では半構造化インタビューの形式を採用した。インタビューは、事前に作成したヒアリングシートに基づき、約 40 分程度を目安として実施した。ヒアリングシートは、基本情報を確認するフェイスシートと、4 つのテーマに沿った質問項目で構成されている。インタビューは 2025 年 12 月 25 日、2026 年 1 月 13 日の 2 回に分けて実施した。

2-4-1. フェイスシートによる基本情報の把握

インタビューの冒頭では、運営団体の基本的な状況を把握するため、フェイスシートによる確認を行った。具体的には、子ども食堂の名称、開催頻度、登録している子どもやボランティアの人数、平均的な参加者数などについて尋ねている。

これらの情報は、各子ども食堂の規模や活動の安定性を把握するための基礎データである。また、市の助成金や市以外の助成金の利用状況、地域フードバンク(つながりフードサポートセンター)の活用状況についても確認し、運営を支える資源の構造を把握できるようにしている。

フェイスシートを最初に設定することで、インタビュー全体の前提条件を共有し、その後の質問内容を具体的な文脈の中で理解できるようにする狙いがある。

2-4-2. 子ども食堂を始めたきっかけと目的意識

第 1 のテーマでは、子ども食堂を始めたきっかけや当初の目的について尋ねた。具体的には、「なぜ子ども食堂を始めたのか」「当初掲げていた目的は何だったのか」「その目的は現在どの程度達成されていると感じているか」といった問いを設定している。これにより、運営者がどのような問題意識を出発点として活動を開始したのか、また、その問題意識が現在どのように変化しているのかを把握することができる。

さらに、「活動を通じて、どのような社会的課題が解決されていると感じているか」という質問を加えることで、運営者自身が子ども食堂の社会的意義をどのように捉えているかを明らかにすることを意図している。

このテーマは、子ども食堂を単なる事業や活動としてではなく、運営者の価値観や理念の表れとして理解するための重要な部分である。

2-4-3. 日常的な運営と現場での工夫

第2のテーマでは、こども食堂の日常的な運営の実態について詳しく尋ねている。食材の調達方法についての質問では、寄付、助成、購入など、複数の方法がどのように組み合わせられているかを把握することを目的としている。これは、運営の安定性や外部支援への依存度を考察するうえで重要な情報となる。

また、こども・大人・ボランティアの交流を促進するために行っている工夫についても尋ねている。単に同じ空間で食事をするだけでなく、どのような配慮や仕掛けによって場づくりが行われているのかを明らかにするためである。

加えて、運営上の課題について語ってもらう質問を設けている。ここでは、人手不足、資金面の不安、運営者の負担感など、継続の難しさに関わる内容が想定されており、成功事例だけでなく実際に運営を行い、継続していく中で感じる課題も含めて把握することを重視している。

2-4-4. 他団体・地域とのつながり

第3のテーマでは、こども食堂が地域や他団体とどのようにつながっているかについて尋ねている。他のこども食堂との交流や情報共有の有無について確認することで、孤立した活動なのか、ネットワークの一部として位置づけられているのかを把握することができる。また、「地域とつながっていると感じるか」という主観的な問いを設けることで、形式的な連携だけでなく、運営者自身の実感を引き出すことを意図している。

さらに、福祉機関や支援団体との連携状況についても質問しており、特に地域フードバンクの活用については、制度的支援と現場活動との接点を確認する観点から重要な設問となっている。

2-4-5. 今後の展望と継続に向けた考え

第4のテーマでは、今後のこども食堂の運営方針や展望について尋ねている。この質問は、将来的な計画が明確に定まっているかどうかを問うというよりも、運営者がどのような方向性を思い描いているか、どのような点に不安や期待を抱いているかを自由に語ってもらうことを目的としている。

運営の継続、規模の拡大・維持、後継者の問題など、運営者の語りから見えてくる課題は、今後の支援策を検討するうえで重要な示唆を与えることが想定される。

2-4-6. インタビュー設計における工夫

本インタビュー調査の設計にあたっては、以下の点を重視した。

- **話しやすさへの配慮**
事前に質問項目を共有し、回答者が内容を把握したうえで安心して臨めるようにした。特に、

課題などを聞くこともあったため、インタビューにあたって事前に返答を考えることができるようにした。

- **評価や正解を求めない構成**

成功や成果だけでなく、悩みや課題についても率直に語ってもらえるよう、問いの表現に配慮した。はじめにフェイスシートで事実について語ってもらい、その後に課題や思いといった内容について尋ねるといった順序にも一定の配慮を施した。

- **アンケート調査との補完関係**

定量データでは把握できない背景や意味づけを、運営者の語りから補完できるように設計した。特に、アンケート調査ではなかなか伝えることが難しい内容についても、このインタビューで聞くことにより、多面的にこども食堂を捉えることを意図した。

このように、本インタビュー調査は、こども食堂の活動を「数字」だけでなく「語り」から理解するための重要な調査として位置づけられる。

第3章 アンケート調査の結果

3-1. 利用者アンケートの調査結果

Q1.あなたの学年を教えてください

Q1	回答数	割合
まだ、しょうがっこうには、っていない	1	1%
小学1年生	9	11%
小学2年生	8	9%
小学3年生	17	20%
小学4年生	10	12%
小学5年生	20	24%
小学6年生	12	14%
中学生以上	8	9%
未回答、非有効回答	0	0%

回答者の学年構成を見ると、小学3年生(20%)、小学5年生(24%)、小学6年生(14%)といった小学校中・高学年の割合が高く、全体として学齢期の後半にあたる子どもたちが多く利用していることが分かる。一方で、小学1・2年生や未就学児の回答も見られ、低学年層の利用も一定程度存在している。また、中学生以上の回答が9%含まれており、子ども食堂が小学生に限定された場ではなく、年齢層の広がりを持った居場所として機能していることがうかがえる。

Q2.あなたの性別を教えてください

Q2	回答数	割合
男子	37	44%
女子	42	49%
答えたくない	6	7%
未回答、非有効回答	0	0%

性別の内訳は、女子49%、男子44%とほぼ同程度であり、性別による利用の偏りは大きくない。「答えたくない」と回答した割合が7%見られる点は、性別に関する回答を無理に求めない設計が、回答者の意思を尊重する形で機能していることを示している。全体として、性別を問わず利用されている場であることが確認できる。

Q3.あなたの家はどこですか？

Q3	回答数	割合
小学校区内	68	80%
小学校区外	10	12%
わからない。まだがっこうには、いっていない	0	0%
未回答、非有効回答	7	8%

居住地については、「小学校区内」が 80%と大多数を占めており、こども食堂が主に学校区を基盤とした地域内のこどもたちに利用されていることが明らかとなった。一方、「小学校区外」からの利用も 12%存在しており、学校区を越えて利用するケースも一定数見られる。これらの結果から、こども食堂が地域密着型でありながら、柔軟に受け入れられている場であることがうかがえる。

Q4.あなたはいつから、このこども食堂に来ていますか？

Q4	回答数	割合
今回、初めてきた	6	7%
今年の1学期から来ている	18	21%
今年の2学期から来ている	12	14%
去年から来ている	32	38%
2年以上前から来ている	14	16%
未回答、非有効回答	3	4%

利用開始時期では、「去年から来ている」(38%)、「2年以上前から来ている」(16%)といった継続利用者が半数以上を占めている。このことから、こども食堂が一時的な利用にとどまらず、長期的に通い続けられる場として定着していることが分かる。また、「今回、初めて来た」や「今年の学期から来ている」といった新規利用者も一定数存在しており、利用者の入れ替わりや新たな参加が継続的に生じている点も特徴的である。ただし、食堂によって開設された時期が異なるため一律に比べられないところがあるという点には留意すべきである。

Q5.あなたはどれくらい、このこども食堂に来ますか？

Q5	回答数	割合
2、3ヶ月に1回くらい	16	19%
1ヶ月に1回くらい	23	27%
1ヶ月に2回くらい	3	4%
ほぼ毎週	34	40%
未回答、非有効回答	9	11%

利用頻度については、「ほぼ毎週」が40%と最も高く、次いで「1か月に1回くらい」(27%)、「2～3か月に1回くらい」(19%)となっている。今回調査を行ったこども食堂自体の開催頻度が異なっているために、単純な比較はできないが、定期的にご利用するこどもが多い一方で、必要に応じてご利用するこどもも存在しており、利用頻度には幅があることが分かる。これは、こども食堂が日常的な居場所として機能している側面と、補完的な場として利用されている側面の両方を持っていることを示している。

Q6.あなたは、こども食堂にはよく1人できますか？誰かといっしょに来ますか？

Q6	回答数	割合
1人でくることが多い	14	16%
ともだちといっしょに来ることが多い	39	46%
家族(兄弟・姉妹・しんせき)と一緒にくることが多い	26	31%
未回答、非有効回答	6	7%

来所形態では、「友達と一緒に来ることが多い」(46%)が最も多く、次いで「家族と一緒に来る」(31%)、「1人で来る」(16%)という結果であった。この結果から、こども食堂が友人関係や家族関係の延長として利用されている場であることが分かると同時に、1人でも来所できる場として受け入れられていることがうかがえる。複数の来所形態が共存している点は、利用しやすさの一因と考えられる。

Q7.なぜ、こども食堂に来るようになりましたか？(当てはまるものを、ぜんぶ選んでください)

Q7	回答数	割合
この時間に、大人が家にいないから	5	6%
ともだちと遊べるから	50	59%
ご飯が誰かと一緒に食べられるから	32	38%
こども食堂の食事がおいしいから	34	40%
1人で家にいるとさみしいから	5	6%
ボランティアの人と会えるから	10	12%
お家の人に、こども食堂に行きなさいと言われたから	10	12%
未回答、非有効回答	3	4%
その他	13	15%

利用理由では、「友達と遊べるから」(59%)が最も多く、「ご飯が食べられる」(38%)、「食事がおいしいから」(40%)が続いた。これらの結果から、食事提供という基本的機能に加えて、交流の場

としての価値が高く評価されていることが分かる。また、「大人が家にいない時間帯であること」などの理由も一定数挙げられており、生活状況に応じた利用である側面も確認された。

Q8.あなたは、こども食堂に来ることで、なにか変わりましたか？(当てはまるものを、ぜんぶ選んでください)

Q8	回答数	割合
遊ぶともだちがふえた	41	48%
さみしいと思う時間が少なくなった	7	8%
地域の大人の知り合いが増えた	22	26%
いろいろな遊びを知ることができた	24	28%
何も変わらない	20	24%
未回答、非有効回答	3	4%
その他	8	9%

「遊ぶ友達が増えた」(48%)が最も多く、「地域の大人の知り合いが増えた」(26%)、「いろいろな遊びを知ることができた」(28%)といった回答が続いた。これらの結果から、こども食堂の利用が人間関係や体験の広がりにつながっていることが分かる。一方で、「何も変わらない」と感じている回答も24%あり、効果の感じ方には個人差が存在している点にも留意が必要である。

Q9.あなたは、こども食堂では周りの友達とどれくらい話したり遊びますか？

Q9	回答数	割合
まったく話したり遊んだりしない	7	8%
あんまり話したり遊んだりしない	3	4%
ちょっと話したり遊んだりする	15	18%
よく話したり遊んだりする	55	65%
未回答、非有効回答	5	6%

友人との交流の程度については、「よく話したり遊んだりする」(65%)が多数を占めており、多くの利用者が活発な交流を経験していることがうかがえる。一方、「まったく話したり遊んだりしない」とする回答も8%存在しており、すべての利用者が同じように交流しているわけではないことも明らかとなった。こども食堂が多様な関わり方を許容する場であることが、この結果から読み取れる。

Q10.あなたは、こども食堂ではボランティアの人とどれくらい話したり遊びますか？

Q10	回答数	割合
まったく話したり遊んだりしない	13	15%
あんまり話したり遊んだりしない	21	25%
ちょっと話したり遊んだりする	21	25%
よく話したり遊んだりする	26	31%
未回答、非有効回答	4	5%

ボランティアスタッフとの人間関係の評価では、「よく話したり遊んだりする」(31%)「ちょっと話したり遊んだりする」(21%)といった肯定的な回答が過半数を占めている。一方で、「まったく話したり遊んだりしない」(15%)と感じている利用者も存在しており、関係性の築き方には個人差があることが示されている。ただし、こども食堂によって、形態がちがう点は留意すべきである。今回の調査対象の中には弁当を配布するこども食堂も含まれており、回答者によっては「まったく話したり遊んだりしない」を選んだ可能性が高い。このように、こども食堂が多様な関わり方を受け入れる場であることが、この結果からも確認できる。

Q11.学校ではあまり遊ばないけれども、こども食堂に来た時には遊ぶ、という友達はいますか？

Q11	回答数	割合
学校でも、こども食堂でも同じように遊ぶ	59	69%
学校では遊ぶけれど、こども食堂では遊ばないとみだちがいる	10	12%
学校では遊ばないけれど、こども食堂では遊ぶともだちがいる	7	8%
未回答、非有効回答	9	11%

「学校でも、こども食堂でも同じように遊ぶ」と回答した割合が 69%と高く、学校での人間関係がこども食堂にも反映されていることが分かる。一方で、「学校では遊ばないが、こども食堂では遊ぶ友達がいる」といった回答も見られ、こども食堂が新たな人間関係を形成する場として機能している側面も確認された。

Q12.あなたは、こども食堂のどんなところが良いと思いますか？(当てはまるものを、ぜんぶ選んでください)

Q12	回答数	割合
ともだちと遊べる	60	71%
ご飯が食べられる	48	56%
誰かと一緒にいられる	29	34%
地域のことがよくわかる	17	20%
いろいろな人と知り合いになれる	30	35%
未回答、非有効回答	3	4%
その他	9	11%

良い点としては、「友達と遊べる」(71%)、「ご飯が食べられる」(56%)、「誰かと一緒にいられる」(34%)といった回答が多く、交流と安心感の双方が評価されていることが分かる。これらの結果から、こども食堂が単なる食事提供の場ではなく、心理的な支えとなる居場所として受け止められていることがうかがえる。

Q13.あなたは、こども食堂で困っていることは何ですか？

Q13	回答数	割合
こども食堂での話し相手や遊び相手がいない	1	1%
こども食堂に来ているこどもと仲がよくない	2	2%
ボランティアの人と仲がよくない	6	7%
こども食堂が家からとおいので大変	9	11%
出される食事が口に合わない	10	12%
未回答、非有効回答	20	24%
その他	38	45%

困りごととしては、「食事が口に合わない」「家から遠い」といった項目が挙げられているものの、いずれも割合は比較的低い水準にとどまっている。未回答やその他の項目にも「なし」という記述が大変を占めていることから、多くの利用者にとって大きな不満は少ないと考えられる。一方で、少数ながら具体的な困りごとが挙げられている点は、今後の改善を検討する上での参考となる。

Q14.あなたにとって、今行っているこども食堂が、どんなこども食堂になったら良いと思いますか？

Q14	回答数	割合
回答あり	57	67%
未回答、非有効回答	28	33%

自由記述については、67%が何らかの記述を行っており、多くの利用者が自身の意見や感想を表明している。一方で、未記入も33%存在しており、自由記述への参加にはばらつきが見られる。主な回答として「いつも通っていて欲しい」「たのしいところ」「いっぱい食べられるこども食堂」といったこども食堂の基本的なサービスを実現して欲しいという希望が改めて認識できる。

Q15.今後、まだこども食堂に来たことがない友達を、さそって一緒に来たいと思いますか？

Q15	回答数	割合
まったくさそいたいとは思わない	9	11%
あんまりさそいたいとは思わない	6	7%
ちょっとさそってみたいと思う	22	26%
とてもさそってみたいと思う	41	48%
未回答、非有効回答	7	8%

友人への紹介意向では、「とても誘ってみたい」(48%)、「ちょっと誘ってみたい」(26%)を合わせると、全体の約4分の3が前向きな意向を示している。この結果から、こども食堂に対する満足度が比較的高く、利用者自身が他者に勧めたいと感じる場であることがうかがえる。

3-2. ボランティアアンケートの調査結果

Q1.あなたの性別について教えてください

Q1	回答数	割合
男性	9	17%
女性	41	79%
答えたくない	2	4%
未回答、非有効回答	0	0%

回答者の性別構成を見ると、女性が79%と全体の大部分を占めており、男性は17%にとどまっている。この結果から、こども食堂のボランティア活動においては、女性の参加が中心的な役割を果たしていることが分かる。調理や配膳、こどもとの関わりといった活動内容との関係を考えると、従来から女性が担ってきた地域活動やケア労働との親和性が影響している可能性も考えられる。

Q2.あなたの年齢について教えてください

Q2	回答数	割合
15歳以下	5	10%
16歳～25歳	2	4%
26歳～39歳	2	4%
40歳～54歳	16	31%
55歳～69歳	11	21%
70歳以上	16	31%
未回答、非有効回答	0	0%

年齢構成を見ると、「40歳～54歳」と「70歳以上」がともに31%を占めており、中高年層と高齢層がボランティア活動の中心となっていることが明らかである。さらに、「55歳～69歳」も21%を占めており、全体として比較的年齢層の高い参加者によって支えられている状況が確認できる。一方で、10代や20代といった若年層の参加は限定的であり、世代間の偏りも見られる。この結果は、こども食堂が地域の中で「経験や時間に余裕のある世代」によって担われている現状を示していると同時に、今後の担い手確保という観点から重要な示唆を含んでいる。

Q3.あなたがこども食堂でボランティアとして働いている期間について教えてください

Q3	回答数	割合
3ヶ月未満	4	8%
3ヶ月以上6ヶ月未満	2	4%
6ヶ月以上12ヶ月未満	12	23%
1年以上2年未満	17	33%
2年以上3年未満	5	10%
3年以上	12	23%
未回答、非有効回答	0	0%

活動期間については、「1年以上2年未満」が33%と最も多く、次いで「3年以上」「6か月以上12か月未満」がそれぞれ23%となっている。この結果から、一定期間継続して活動しているボランティアが多く、短期的な参加にとどまらず、継続的な関与がなされていることが分かる。また、「3か月未満」や「3か月以上6か月未満」といった比較的活動歴の浅い回答も見られ、新規参加者が継続的に流入している様子もうかがえる。全体として、定着層と新規層の双方が存在しており、活動が安定的に運営されている状況が読み取れる。

Q4.あなたがこども食堂でボランティアとして行なっている主な活動は何でしょうか？(当てはまるものを全て選んでください)

Q4	回答数	割合
調理	29	56%
配膳	18	35%
子供の話し・遊び相手	25	48%
未回答、非有効回答	1	2%
その他	13	25%

主な活動内容としては、「調理」が56%と最も多く、「こどもの話し相手・遊び相手」(48%)、「配膳」(35%)が続いている。この結果から、こども食堂のボランティアは、単なる食事提供にとどまらず、こどもとの直接的な関わりを含む多様な役割を担っていることが分かる。また、「その他」が25%と一定数存在しており、会場準備や片付け、運営補助など、表に見えにくい業務も含めて活動が成り立っていることが示唆される。

Q5.あなたがこども食堂でボランティアを始めたきっかけは何でしょうか？(当てはまるものを全て選んでください)

Q5	回答数	割合
こどもたちの役に立ちたかった	31	60%
自分の生きがい	16	31%
社会貢献をしたい	21	40%
友人をつくりたい	6	12%
ひまだったから	3	6%
地域とつながりを作りたかったから	28	54%
人に誘われたから	19	37%
特に理由はない	2	4%
未回答、非有効回答	0	0%
その他	5	10%

参加のきっかけとして最も多かったのは「こどもたちの役に立ちたかった」(60%)であり、次いで「地域とつながりを作りたかった」(54%)、「社会貢献をしたい」(40%)が挙げられている。これらの結果から、利他的動機や地域貢献意識が、ボランティア参加の主要な背景となっていることが明らかである。一方で、「人に誘われたから」(37%)という回答も多く、個人の自発的意欲だけでなく、既存の人間関係やネットワークが参加を後押ししている側面も確認できる。この点は、地域内でのつながりがボランティア参加を促進する重要な要因であることを示している。

Q6.あなたはこども食堂でのボランティアにどれほどやりがいを感じますか？

Q6	回答数	割合
まったくやりがいを感じない	0	0%
あまりやりがいを感じない	3	6%
少しやりがいを感じる	12	23%
とてもやりがいを感じる	36	69%
未回答、非有効回答	1	2%

やりがいについては、「とてもやりがいを感じる」が 69%、「少しやりがいを感じる」が 23%となっており、9割以上の回答者が何らかのやりがいを感じている結果となった。「全く感じない」という回答が見られなかったことから、こども食堂でのボランティア活動は、多くの参加者にとって肯定的な経験となっているといえる。この高い満足度は、活動の継続意向や、他者への参加の勧誘にも影響を与える重要な要素である。

Q7.こども食堂でのボランティアにやりがいを感じる(感じられそう)と思うのはどんな時でしょうか？(当てはまるものを全て選んでください)

Q7	回答数	割合
利用者のこどもが増えた時	19	37%
自分のスキルがアップしたと実感した時	9	17%
友人・仲間が増えた時	18	35%
地域とのつながりを実感した時	21	40%
こどもの笑顔が見れた時	43	83%
未回答、非有効回答	0	0%
その他	7	13%

やりがいを感じる場面としては、「こどもの笑顔が見れた時」が 83%と突出して高く、こどもとの直接的な関わりが最も大きな動機づけとなっていることが明確に示されている。さらに、「地域とのつながりを実感した時」(40%)や「利用者のこどもが増えた時」(37%)といった回答も多く、活動の広がりや社会的意義を実感できることが、やりがいにつながっていることが分かる。これらの結果は、ボランティア活動が個人的満足だけでなく、地域全体との関係性の中で意味づけられていることを示している。

Q8.あなたがこども食堂でのボランティアに対してしんどいと思うことは何でしょうか？(当てはまるものを全て選んでください)

Q8	回答数	割合
業務が体力的にしんどい	8	15%
こどもの相手をどうすれば良いのかわからない	6	12%
他のボランティアとの人間関係	3	6%
ボランティアの時間の調整が難しい	12	23%
しんどいと思うことはない	25	48%
未回答、非有効回答	1	2%
その他	2	4%

「しんどいと思うことはない」とする回答が 48%と最も多く、活動そのものに大きな負担を感じていないボランティアが多いことが分かる。一方で、「ボランティアの時間の調整が難しい」(23%)や「業務が体力的にしんどい」(15%)といった現実的な課題も挙げられている。これらの結果は、活動への意欲が高い一方で、生活との両立や身体的負担が、継続における潜在的な課題となっていることを示唆している。

Q9.あなたは、こども食堂に来るこどもたちとの交流は十分にあると感じますか？

Q9	回答数	割合
全くない	1	2%
少しだけある	18	35%
かなりある	26	50%
わからない	3	6%
未回答、非有効回答	4	8%

こどもたちとの交流については、「かなりある」が50%、「少しだけある」が35%と、多くのボランティアが一定程度の交流を感じていることが分かる。「全くない」とする回答はごく少数であり、活動を通じてこどもと関わる機会が比較的確保されていることがうかがえる。ただし、こども食堂によって、形態がちがう点は留意すべきである。今回の調査対象の中には弁当を配布するこども食堂も含まれており、回答者によっては「全くない」「少しだけある」を選んだ可能性が高い。この結果は、こども食堂が単なる食事提供の場ではなく、人と人との関係性が形成される場として機能していることを示している。

Q10.あなたは、他のボランティアスタッフとのつながりを感じられますか？

Q10	回答数	割合
全く思わない	0	0%
少しそう思う	16	31%
とてもそう思う	34	65%
わからない	1	2%
未回答、非有効回答	1	2%

他のボランティアとのつながりについては、「とてもそう思う」が65%、「少しそう思う」が31%と、ほとんどの回答者が肯定的に捉えている。この結果から、ボランティア同士の関係性が比較的良好であり、協力的な雰囲気の中で活動が行われていることが分かる。こうした人的関係は、活動の継続性や満足度を支える重要な基盤となっている。

Q11.あなたのボランティア先のこども食堂は福祉などの支援機関とつながっていると思いますか？

Q11	回答数	割合
全く思わない	1	2%
少しそう思う	18	35%
とてもそう思う	28	54%
わからない	5	10%
未回答、非有効回答	0	0%

福祉などの支援機関とのつながりについては、「とてもそう思う」「少しそう思う」を合わせると約 9割に達している。多くのボランティアが、こども食堂が他の支援機関と連携しながら運営されていると認識していることが分かる。この認識は、こども食堂が地域福祉の一部として位置づけられていることを示すものである。

Q12.あなたのボランティア先のこども食堂は、地域とつながっていると思いますか？

Q12	回答数	割合
全く思わない	1	2%
少しそう思う	8	15%
とてもそう思う	39	75%
わからない	2	4%
未回答、非有効回答	2	4%

地域とのつながりについては、「とてもそう思う」が 75%と高い割合を占めており、こども食堂が地域に根ざした活動として認識されていることが明らかである。この結果は、こども食堂が地域住民や関係者との関係性の中で成立している「地域拠点」としての性格を有していることを示唆している。

Q13.「Q12」で「少しそう思う」「とてもそう思う」と回答された方にお聞きします。どんな時に、こども食堂は地域とつながっていると感じますか？

Q13	回答数	割合
回答あり	42	81%
未回答	10	19%

自由記述が多く寄せられている点から、ボランティアがそれぞれの具体的な経験を通じて地域とのつながりを実感していることが分かる。内容としては、地域住民からの声かけや差し入れ、行事への参加など、日常的な交流を通じた実感が多く見られた。例えば、「地域の方々からの食品提供や、人から人へと口コミが伝わっていると思えた！」「こども食堂開催時に、高齢の利用者さんとこども達、学校の先生方が声をかけあっている姿を見た時。」「来てくれた方がまた地域の方をお誘いして食堂に来てくれた時」といった回答があった。

Q14.あなたが、こども食堂でのボランティアを通じて、変化したと思うことはなんですか？(当てはまるものを全て選んでください)

Q14	回答数	割合
社会貢献ができていると感じられるようになった	19	37%
スキルアップを感じられるようになった	14	27%
地域とのつながりを感じられるようになった	26	50%
他の人とのコミュニケーションが活発になった	25	48%
寂しいと感じる時間が少なくなった	7	13%
何も変化していない	5	10%
未回答、非有効回答	0	0%
その他	2	4%

「地域とのつながりを感じられるようになった」「他の人とのコミュニケーションが活発になった」といった回答が多く、ボランティア活動が個人の意識や対人関係に変化をもたらしていることが分かる。一方で、「何も変化していない」とする回答も一定数存在しており、活動から得られる影響には個人差があることも示されている。

Q15.現在ボランティアを行なっているこども食堂について、どんな課題・問題があると思いますか？

Q15	回答数	割合
ボランティアの人が足りない	11	21%
ボランティア活動の環境がよくない	1	2%
十分にこどもと交流する時間がとれていない	6	12%
提供している食事の質がよくない	1	2%
運営者とボランティアでの話し合いが十分ではない	3	6%
特に課題・問題はない	19	37%
未回答、非有効回答	4	8%
その他	16	31%

現在活動しているこども食堂における課題や問題について尋ねたところ、最も多かった回答は「特に課題・問題はない」であり、37%を占めた。この結果から、多くのボランティアが、現状の運営や活動内容について概ね肯定的に評価していることがうかがえる。一方で、「ボランティアの人が足りない」と回答した者が21%、「十分にこどもと交流する時間がとれていない」とする回答も12%見られた。この結果は、食事の準備や片付けといった業務的な作業に追われる中で、本来重視されるべきこどもとの関わりの時間が制約されている現状を示唆している。

「ボランティア活動の環境がよくない」「提供している食事の質がよくない」といった回答はそれぞれ2%にとどまっており、活動環境や食事内容そのものに対する不満は全体としては限定的であることが分かる。この点からは、基本的な運営水準については、ボランティアから一定の評価を得ている状況がうかがえる。

Q16.あなたのボランティア先のこども食堂について、どのように改善できると思いますか？

Q16	回答数	割合
回答あり	21	40%
未回答	31	60%

改善点については自由記述が多く、具体的な意見を持つボランティアが一定数存在していることが分かる。一方で未回答も多く、現状に大きな不満を感じていない層も一定程度存在していることがうかがえる。具体的に挙げられた意見として、「広い地域からの参加が増えてほしいので広報していく」「若い世代のボランティアが増えてほしいと思う」「地域にとらわれず広く開くこと。ボランティア一人ひとりが支援者としてこどもたちと接する。お客様をしない。」といったものがあった。

Q17.あなたのボランティア先のこども食堂について、ボランティアの活動を継続したいと思いますか？

Q17	回答数	割合
全く思わない	2	4%
少しそう思う	4	8%
とてもそう思う	45	87%
未回答、非有効回答	1	2%

活動継続意向については、「とてもそう思う」が87%と非常に高く、多くのボランティアが今後も活動を続けたいと考えている。この結果は、こども食堂でのボランティア活動が参加者にとって意義深く、継続可能なものとして受け止められていることを明確に示している。

3-3 高学年児童を対象とした「こども食堂のイメージ」に関するアンケート調査結果

Q1.あなたの通っている小学校を教えてください

Q1	回答数	割合
新堂小学校	108	36%
大伴小学校	190	64%

回答者の内訳を見ると、大伴小学校が64%、新堂小学校が36%となっており、本調査は両校の高学年児童を対象としながらも、大伴小学校の児童がやや多い構成となっている。この分布は、地域内における学校規模や在籍児童数の違いを反映している可能性がある。また、両校を含めた調査設計により、特定の学校区に限定されない地域全体の傾向を把握することが可能となっている点は、本調査の特徴の一つである。今後、学校区ごとの認知度や利用経験の違いを検討する際の基礎データとしても有効である。

Q2.あなたの学年を教えてください

Q2	回答数	割合
4年生	108	36%
5年生	98	33%
6年生	92	31%

学年別では、4年生が36%、5年生が33%、6年生が31%と、ほぼ均等な割合となっている。この結果から、本調査は特定の学年に偏ることなく、高学年児童全体の意識をバランスよく反映しているといえる。学年が上がるにつれて行動範囲や人間関係が広がることを踏まえると、今後の分析では、学年差による認知や利用意向の違いを検討する余地もある。いずれにせよ、本調査は高学年全体の傾向を把握する上で妥当な構成となっている。

Q3.あなたの性別を教えてください

Q3	回答数	割合
男子	146	49%
女子	125	42%
答えたくない	26	9%
未回答、非有効回答	1	0%

性別については、男子が 49%、女子が 42%、「答えたくない」が 9%となっており、男女比に大きな偏りは見られない。男女いずれの視点も一定程度反映されている点は、意識や行動の差異を検討する上で重要である。また、「答えたくない」という選択肢を設けたことで、児童が無理に回答しなくてもよい環境が整えられており、こどもを対象とした調査として心理的配慮を行なった。このことは、回答の信頼性を高める要因の一つと考えられる。

Q4.「こども食堂」とはどんな場所か知っていますか？

Q4	回答数	割合
知っている	228	77%
知らない	70	23%

「こども食堂」を知っていると回答した児童は 77%に達しており、用語としての認知は比較的高い水準にあることが分かる。この結果は、学校や地域、メディアなどを通じて、こども食堂という存在が一定程度共有されていることを示している。一方で、約 4 人に 1 人は「知らない」と回答しており、全ての児童に浸透しているわけではない。認知の有無が、その後の利用意向やイメージ形成に影響する可能性を考えると、基礎的な情報提供の重要性が示唆される。

(新堂小学校)

Q4	回答数	割合
知っている	84	78%
知らない	24	22%

(大伴小学校)

Q4	回答数	割合
知っている	144	76%
知らない	46	24%

Q5.あなたの家の近くにある「こども食堂」がどこにあるか知っていますか？

Q5	回答数	割合
知っている	180	60%
知らない	117	39%
未回答、非有効回答	1	0%

家の近くにあるこども食堂の場所を「知っている」と回答した児童は 60%であり、Q4 の認知度よりも低い割合となっている。このことから、こども食堂という存在は知っていても、具体的な立地やアクセス方法まで把握していない児童が一定数存在することが分かる。場所が分からないことは、利用に至らない大きな要因の一つであり、情報提供の方法や伝え方に工夫の余地があることを示している。

以下は、学区別の数値である。大伴小学校区におけるこども食堂の認知度は、学区内唯一のおおともこども食堂をさしており、当該食堂は開設から1年足らずであるという状況を鑑みると、その認知度が 59%であることは注目に値する。これは当該食堂による、地域とのつながりの強さを示していると思われる。

(新堂小学校)

Q5	回答数	割合
知っている	68	63%
知らない	39	36%
未回答、非有効回答	1	1%

(大伴小学校)

Q5	回答数	割合
知っている	112	59%
知らない	78	41%

Q6.次のこども食堂のうち、あなたが知っているものはどれですか？(当てはまるものを、ぜんぶ選んでください)

(新堂小学校)

Q6	回答数	割合
こども食堂 そこに愛はあるんか	17	16%
はっぴい食堂	6	6%
ほっとスペース とんだばやし	17	16%
おかえり食堂	29	27%
なの花食堂	4	4%
おおとも子ども食堂	2	2%

(大伴小学校)

Q6	回答数	割合
こども食堂 そこに愛はあるんか	22	12%
はっぴい食堂	18	9%
ほっとスペース とんだばやし	22	12%
おかえり食堂	13	7%
なの花食堂	10	5%
おおとも子ども食堂	143	75%

Q7.今までに、1回でもこども食堂に行っただことがありますか？

Q7	回答数	割合
行ったことがある	133	45%
行ったことはない	159	53%
未回答、非有効回答	6	2%

「行ったことがある」と回答した児童は 45%であり、半数近くがこども食堂を実際に利用した経験を持っている。一方で、53%は「行ったことがない」と回答しており、利用経験の有無がほぼ二分されている状況である。この結果は、こども食堂が地域に一定程度浸透している一方で、利用が特定の層にとどまっている可能性も示唆している。今後、利用経験の有無による意識の違いの比較や、こういった要因が利用経験に影響しているのかといった分析が有効である。

(新堂小学校)

Q7	回答数	割合
行ったことがある	48	44%
行ったことはない	57	53%
未回答、非有効回答	3	3%

(大伴小学校)

Q7	回答数	割合
行ったことがある	85	45%
行ったことはない	102	54%
未回答、非有効回答	3	2%

Q8.(今までに、こども食堂に行ったことがある人におききします)次のこども食堂のうち、あなたが行ったことがあるものはどれですか？(当てはまるものを、ぜんぶ選んでください)

(新堂小学校)

Q8	回答数	割合
こども食堂 そこに愛はあるんか	7	6%
はっぴい食堂	4	4%
ほっとスペース とんだばやし	7	6%
おかえり食堂	18	17%
なの花食堂	0	0%
おおとも子ども食堂	1	1%

(大伴小学校)

Q8	回答数	割合
こども食堂 そこに愛はあるんか	12	6%
はっぴい食堂	12	6%
ほっとスペース とんだばやし	12	6%
おかえり食堂	9	5%
なの花食堂	5	3%
おおとも子ども食堂	80	42%

この質問項目に関するデータをみる上で、上記 Q7 でこども食堂に「行ったことがある」という回答者に対して、その学区における合計数が違うという点は注意が必要である。この差異が発生した原因については、主に2つの原因が考えられる。1つ目は、児童・生徒が自分が行ったことのあるこども食堂の名前を覚えていなかった、というものである。2つ目は、あえて自分の学区ではないこども食堂に行ったということである。2つ目については、第3章第1節の Q3 の回答にもあるように、様々な事情によって、自分の小学校区外のこども食堂への利用も行われていることと合致する。

Q9.(こども食堂に行ったことがない人にお聞きします)もし、こども食堂に行くと、どんなことがありますか？(当てはまるものを、すべて選んでください)

Q9	回答数	割合
遊ぶ友達が増えそう	100	34%
美味しいものが食べられそう	95	32%
なんとなく楽しそう	104	35%
時間つぶしになりそう	45	15%
さみしい気持ちが減りそう	25	8%
何も変わらなさそう	19	6%
勉強をしろと言われそう	12	4%
知らない人と話をさせられそう	27	9%
スマホゲームをしたら怒られそう	21	7%
未回答、非有効回答	98	33%

行ったことがない児童のイメージとしては、「なんとなく楽しそう」「遊ぶ友達が増えそう」「美味しいものが食べられそう」といった肯定的な選択肢が多く選ばれている。このことから、こども食堂に対して必ずしも否定的な印象が強いわけではないことが分かる。一方で、「知らない人と話をさせられそう」「スマホゲームをしたら怒られそう」といった不安や抵抗感を示す回答も一定数存在しており、利用に対する心理的ハードルが存在することも明らかである。

Q10.(こども食堂に行ったことがない人にお聞きします)なぜ、こども食堂に行ったことがないでしょうか？(当てはまるものを、ぜんぶ選んでください)

Q10	回答数	割合
家で、1人や兄弟姉妹だけにいる方がいいから	37	12%
いきたいと思うけれど、いく機会がなかった	39	13%
場所がよくわからないから	48	16%
仲の良い友達が行っていないから	19	6%
お金がかかるから	28	9%
何をする場所かよくわからないか	31	10%
知らない人が多いから	35	12%
使い方がわからないから	19	6%
まわりの人にどうおもわれるかわからないから	22	7%
いつ開いているかわからないから	30	10%
開いている時は用事があるから	19	6%
家の近くにないから	22	7%
べつに興味がないから	61	20%
未回答、非有効回答	129	43%

利用していない理由としては、「いきたいと思うけれど、いく機会がなかった」「場所がよくわからない」「何をやる場所かよくわからない」といった回答が多く見られた。この結果から、こども食堂への関心が全くないというよりも、情報不足やきっかけの欠如が主な要因であることが示唆される。一方で、「べつに興味がない」とする回答も一定数あり、関心の度合いには個人差があることが分かる。

Q11.(こども食堂に行ったことがない人にお聞きします)今後こども食堂に行ってもいいと思いますか？

Q11	回答数	割合
全く行きたいとは思わない	35	12%
あんまり行きたいとは思わない	54	18%
ちょっとは行きたいと思う	72	24%
とても行きたいと思う	21	7%
未回答、非有効回答	116	39%

今後の利用意向については、「ちょっとは行きたいと思う」「とても行きたいと思う」を合わせると約3割となり、潜在的な利用可能層が一定程度存在していることが分かる。一方で、消極的な回答も見られ、利用意向が二極化している傾向もうかがえる。この結果は、利用促進に向けた情報提供や体験機会の工夫が重要であることを示している。

Q12.家以外で、あなたが放課後や週末、よく時間を過ごす場所はどこですか？(当てはまるものを、すべて選んでください)

Q12	回答数	割合
図書館・公民館	21	7%
公園	135	45%
友達の家	87	29%
おじいちゃん、おばあちゃん、しんせきの家	49	16%
コンビニ	42	14%
スーパー・マーケット	67	22%
かがりの郷(さと)	90	30%
トンパル(多文化共生・人権プラザ)	16	5%
家からほとんど出ない	108	36%

放課後や週末の過ごし方としては、「公園」「かがりの郷」「友達の家」「家からほとんど出ない」といった回答が多く、児童の行動範囲が比較的限定されている実態が示されている。この結果は、地域における居場所の選択肢が必ずしも豊富ではない可能性を示唆している。こども食堂が、こうした生活動線の中でどのような役割を果たし得るのかを考える上で、重要な背景情報となる。

Q13.放課後や週末を過ごすために、どんな場所があったら良いなと思いますか？

Q13	回答数	割合
回答あり	239	80%
未回答	59	20%

自由記述を中心とした回答からは、「ゆっくり過ごせる」「自由に遊べる」「友達と一緒にいられる」といった要素を求める声が多く見られた。これらは、設備の充実以上に、心理的な安心感や人との関係性を重視していることを示している。こども食堂がこうしたニーズにどの程度応えられているのかを検討することは、今後の運営改善にとって重要である。

Q14.最近、悩み事やしんどいなと思うことはありますか？ある人は、どんなことですか？

Q14	回答数	割合
回答あり	148	50%
未回答	150	50%

自由回答を行なったこどもの大半は、「なし」と答えた一方、少数ではあるが「習い事」「友人・家族関係」について何らかの悩みや「しんどさ」を抱えていると回答している。高学年期特有の不安や葛藤が広く存在していることなど、内容は多様であると考えられ、複合的な要因が影響している可能性がある。この結果は、こども食堂が単なる食事の場にとどまらず、安心して過ごせる居場所として果たし得る役割を示唆している。

Q15.あなたは、いろんな友達と仲良くできていると思いますか？

Q15	回答数	割合
全くそうは思わない	13	4%
あんまりそうは思わない	28	9%
少しそう思う	104	35%
とてもそう思う	153	51%

「いろんな友達と仲良くできている」と肯定的に回答した児童が半数を超えている一方で、そうではないと感じている児童も一定数存在している。友達関係の感じ方には個人差があり、学校生活の中で孤立感を抱く児童が存在する可能性も示唆される。この点は、地域における居場所づくりの必要性を考える上で重要である。

Q16.あなたは、自分がひとりぼっちだと思いますか？

Q16	回答数	割合
全くそうは思わない	122	41%
あんまりそうは思わない	89	30%
少しそう思う	30	10%
とてもそう思う	10	3%
わからない	46	15%
未回答、非有効回答	1	0%

「自分がひとりぼっちだと思うか」という問いに対しては、否定的な回答が多数を占めているものの、「そう思う」「少しそう思う」と感じている児童も一定数存在している。表面的には見えにくい孤独感や疎外感が存在している可能性があり、支援の必要性を検討する上で重要な結果である。

Q17.あなたは、地域の大人と交流ができていると思いますか？

Q17	回答数	割合
全くそうは思わない	28	9%
あんまりそうは思わない	110	37%
少しそう思う	112	38%
とてもそう思う	45	15%
未回答、非有効回答	3	1%

地域の大人と交流できていると感じている児童は過半数を超えており、学校外での人間関係が一定程度形成されていることが分かる。一方で、交流を感じていない児童も少なくはない。こども食堂は、こうした交流機会を補完する場となり得る可能性を持っている。

Q18.あなたは、住んでいる地域が好きだと思いますか？

(新堂小学校)

Q18	回答数	割合
全くそうは思わない	3	3%
あんまりそうは思わない	16	15%
少しそう思う	36	33%
とてもそう思う	52	48%
未回答、非有効回答	1	1%

(大伴小学校)

Q18	回答数	割合
全くそうは思わない	8	4%
あんまりそうは思わない	17	9%
少しそう思う	61	32%
とてもそう思う	103	54%
未回答、非有効回答	1	1%

住んでいる地域が好きかを尋ねる本質問項目に対して「とてもそう思う」「少しそう思う」と回答した生徒の合計は2学区とも 80%を超えている一方、否定的な回答も一定数存在している。この結果は、地域への愛着が必ずしも一様ではないことを示している。地域との関わりや経験の積み重ねが、愛着形成に影響している可能性があり、こども食堂を含む地域活動の役割を考える上で重要な示唆を与えている。

第4章 インタビュー調査の結果

4-1. はっぴい食堂

4-1-1. こども食堂の概要と運営実態

はっぴい食堂は、月1回程度、第2または第4土曜日に開催されているこども食堂である。開催時間は午前10時頃から14時頃までと比較的長く、こどもたちがゆったりと過ごせる時間設定が特徴である。開催日は年間計画として固定されているわけではなく、概ね1か月前を目安に決定されている。

登録しているこどもの人数は約8名であるが、実際の参加人数は回によって異なり、少ない場合は2名、多い場合でも6名程度と、小規模な運営が行われている。このような規模感には、こども一人ひとりの様子を丁寧に見守ることを可能にしている一方で、活動の広がりという点では一定の制約も伴っている。

会場は2LDKのアパートで、最大収容人数は14～15名程度である。他法人の事務所として使用されている場所を借用しており、運営コストの軽減に大きく寄与している。

4-1-2. ボランティア体制とその特徴

はっぴい食堂では、約6名の大人ボランティアが登録しており、実際の活動には毎回3名程度、多い場合で4～5名が参加している。ボランティアの年齢層は40代から70代までと幅広く、地域住民を中心とした構成となっている。

ボランティアの参加経路は多様であり、市主催のこども食堂関連講演会を通じて知り合った人、広報誌を見て自主的に連絡してきた人、こどもと一緒に参加する中で自然と運営を手伝うようになった保護者など、フォーマル・インフォーマル双方のネットワークが活用されている点が特徴的である。また、絵本の読み聞かせを行う知人や、料理を得意とする外国籍の参加者が関わるなど、多様な背景をもつ人々が活動に関与している。

4-1-3. 活動開始の経緯と理念

はっぴい食堂は、現在の名称での活動は約3年であるが、その前身として別の場所で「ほっこり食堂」という形の活動が行われていた。もともとは、人権教育啓発推進センターにおける学習支援活動がきっかけであり、午前中に学習支援を行い、その後に昼食を提供するという流れが基盤となっていた。

当初から一貫している活動理念として、外国にルーツのある子どもや障がいのある子どもが安心して過ごせる「居場所」をつくることが挙げられる。少人数で異年齢の人々が自然に関われる環境を重視しており、学校という制度的空間とは異なる価値を持つ場として位置づけられている。

インタビューでは、学校では目立たない子どもが、子ども食堂では得意なことを発揮する場面があることが語られており、子ども食堂が子どもの自己肯定感や多様な役割経験を支える機能を果たしていることが示唆された

4-1-4. 活動内容と工夫

現在、はっぴい食堂では子どもと大人と一緒に調理を行い、食後はカードゲーム、ボードゲーム、楽器演奏などを通じて自由に過ごす時間が設けられている。特に「一緒に料理をすること」は、年齢や立場を超えた自然な交流を生み出す重要な活動として位置づけられている。

また、活動の規模拡大よりも、子ども一人ひとりと丁寧に関われる関係性を重視しており、大規模化を積極的にめざしていない点も特徴である。このような運営方針は、子ども食堂の多様なあり方を示す一例といえる。

4-1-5. 助成・支援体制

運営資金については、市からの助成金を活用しており、活動初期には冷蔵庫や炊飯器などの備品整備に充てられた。現在も毎年、決算報告および活動報告を提出することで、補助金を受けている。

金銭的支援に加え、つながりフードサポートセンターや社会福祉協議会からの野菜提供、ライオンズクラブからの絵本寄付、企業からのおもちゃ寄付など、多様な物的支援が活動を支えている。これらの支援は、地域におけるネットワーク型支援の実態を示すものといえる

4-1-6. 課題と今後の展望

課題としては、ロコミ中心であるため利用者が広がりにくい点や、代表者自身が担い手の世代交代を意識している点が挙げられた。一方で、運営者は規模拡大そのものを目的とはしておらず、各小学校区に1か所ずつ、無理のない形で子ども食堂が存在することが理想であると述べている。

このことから、はっぴい食堂の実践は、「量的拡大」ではなく「質的充実」や「地域分散型モデル」としての子ども食堂の可能性を示唆する事例であると考えられる。

4-2. こども食堂そこに愛はあるんか

4-2-1. こども食堂の概要と運営実態

「こども食堂 そこに愛はあるんか」は、富田林市内において週1回(水曜日)開催されているこども食堂であり、2020年に活動を開始した。開催時間は16時から18時までで、月4回の定期開催を継続しており、開始当初から頻度や時間帯に大きな変更はない。

運営形態の特徴として、弁当型を基本としている点が挙げられる。1回あたりの提供数は100食以上にのぼる。利用者は登録制ではなく、前週にこどもが名前を記入する簡易的な申込方式を採用しているが、当日の飛び込み参加にも対応できるよう、常に余裕を持った準備が行われている。

会場は飲食店の2階宴会場を活用しており、店内で食事をするこどもも、持ち帰るこどもも可能である。開催時間を夕方に設定しているのは、「水曜日の夕食1回分でも保護者の負担を軽減したい」という運営者の意図によるものであり、食事支援としての役割を強く意識した運営がなされている。

4-2-2. ボランティア体制とその特徴

本食堂では、固定的なボランティア登録制度は設けられていない。主な担い手は、利用するこどもの保護者であり、各自が都合のつく時間帯に手伝う形で運営に関わっている。そのため、日によって参加人数にはばらつきがあるが、延べ人数としては10~15名程度がボランティアとして関与している。

人手が不足する場合には、会場となっている飲食店のスタッフが補助に入る体制が取られており、柔軟な人的支援によって運営の安定が図られている。このように、制度化されたボランティア体制よりも、保護者参加型・地域協力型の運営が特徴である。

4-2-3. 活動開始の経緯と理念

活動開始のきっかけは、新型コロナウイルス感染症の拡大期であった。飲食店の休業が相次ぐ中で、アルバイトができなくなった大学生や、保護者の収入減によって食事に困る家庭・若者が増加している状況を目の当たりにしたことが大きな契機となっている。

運営者の木下氏は、「それなら、店に来て無料で食べていけばいい」というシンプルな発想から食事提供を始め、経営者仲間や支援者からの後押しを受けて、正式にこども食堂として活動を立ち上げた。活動の理念としては、こどもの食の確保にとどまらず、こどもや保護者が「安心できる居場所」を地域につくることを重視している。

現在も目的は「達成途中」であると認識されており、将来的には高齢者の居場所や世代間交流の拠点としての機能も強化していきたいという意向が示されている。

4-2-4. 活動内容と工夫

活動の中心は弁当の提供であるが、付随して自然な交流が生まれる環境づくりが意識されている。特別なプログラムを常設するのではなく、けん玉教室の講師や大学生(教育系・芸術系)が来訪することで、勉強を教えたり、話し相手になったりといった関わりが自然発生的に生じている。

また、保護者への提供については「必ず子どもと一緒に食べることを条件とするなど、共食を通じた関係づくりを重視している点も特徴である。こうした運営は、支援を前面に出しすぎず、利用者が「普通に過ごせる場」として参加できる工夫と言える。

4-2-5. 助成・支援体制

運営資金については、富田林市の助成金を継続的に活用しているほか、大阪府関連の助成金をイベント(サーカス観覧等)で一度利用した経験がある。ただし、これらの助成金は常時確保できるものではなく、特にイベント型助成は抽選倍率が高いため、恒常的な財源としては位置づけられていない。

食材は、フードバンク大阪や地域のつながりフードサポートセンター、地元農家(米・野菜)、経営者仲間からの寄付など、多様なルートから調達されている。不足分、特に肉類などについては自己負担で購入することもあり、持ち出し金は毎回発生している。余剰となった食材や菓子類については、他の子ども食堂団体等へも活用いただいている。

4-2-6. 課題と今後の展望

現在、運営者自身は大きな運営上の課題は感じていないと述べている。その背景には、富田林市における助成制度や物資支援が比較的充実していること、また地域の経営者ネットワークが機能していることがある。一方で、「多くの子ども食堂に共通する最大の課題は資金である」という認識は共有されている。他団体との関係では、他の子ども食堂と開催曜日をずらす工夫や、社会福祉協議会の配布会での情報交換、地域商店との協力関係が構築されている。また、日常的な活動を通じて、登下校時の見守りを自主的に行う地域住民が現れるなど、地域全体で子どもを支える雰囲気醸成されつつある。

今後は、週1回の食堂活動を継続しつつ、フリースクール的な居場所づくりにも段階的に取り組む構想が示されている。学校に行きづらい子どもが増えている現状を踏まえ、無理に登校を促すのではなく、「安心して過ごせる別の選択肢」を地域に用意することをめざしており、食堂活動と並行しながら柔軟に進めていく方針である。

4-3. なの花食堂

4-3-1. こども食堂の概要と運営実態

なの花食堂は、富田林市若松町東に拠点を置く認定 NPO 法人「こども・若もの支援ネットワーク おおさか」が運営するこども食堂である。運営実務は、同法人の理事であり、就労継続支援 B 型事業所「なの花」の管理者を務める高塚氏が主に担っている。活動開始は 2024 年 9 月であり、比較的新しい取り組みである。

開催頻度は月 1 回程度で、土曜日開催が多いものの、平日の夕方(金曜日)に実施される場合もあり、曜日は固定されていない。利用者は 1 回あたりこども約 5 名程度で、保護者同伴での参加がほとんどである。固定的な利用者と、新たに来訪する利用者が混在しており、規模としては小規模ながらも、継続的な利用が徐々に形成されつつある段階にある。

広報は、法人のホームページをはじめ、チラシ配布(小学校、掲示板、公営住宅へのポスティング)、社会福祉協議会での配架など、比較的オーソドックスな手法が用いられている。ただし、現在の拠点が企業団地の端に位置していることから、地域住民との自然な接点生まれにくく、利用者の広がりには限定的であると認識されている。

4-3-2. ボランティア体制とその特徴

なの花食堂の運営体制は、少人数によるコンパクトな構成が特徴である。ボランティア登録者は約 5 名で、1 回あたりの参加人数はおおよそ 3 名程度である。これに加え、法人スタッフ約 3 名、就労継続支援 B 型事業所の利用者(メンバー)4~5 名が関わり、全体として約 10 名体制で運営されている。

このように、ボランティア、法人スタッフ、事業所利用者が役割を分担しながら協働する体制は、なの花食堂の大きな特徴である。特に、事業所利用者が食堂運営に関わることで、日常的な就労支援や生活支援の延長線上に、地域との接点が位置づけられている点が注目される。

一方で、就労継続支援 B 型事業所という性質上、障がいのある人への誤解や不安が地域側に存在する可能性も運営者は意識している。そして、「誰もが安心して過ごせる場」を維持することの難しさが課題として認識されている。

4-3-3. 活動開始の経緯と理念

なの花食堂の活動は、法人がこれまで実践してきた「その人らしく生きるための伴走支援」の延長線上に位置づけられている。法人は、障がいのある人、不登校・ひきこもりの若者などを対象に支援を行ってきたが、その中で、地域の高齢化や貧困世帯、母子家庭、孤立する人々の存在を強く意識するようになった。

「何かあったときに頼れる居場所を地域につくりたい」という思いが、こども食堂開始の直接的な動機である。2024年に現在の拠点へ移転したことで、空間的な余裕が生まれ、地域に開かれた居場所づくりを実践しやすくなったことも、大きな転機となった。

運営者は、活動が始まったばかりであり、当初掲げた目的の達成にはまだ時間がかかると率直に認識している。一方で、チラシを見て訪れた祖母と孫、母子家庭の利用など、支援を必要とする層の利用が少しずつ確認されており、理念に沿った実践が部分的に現れ始めている段階にある。

4-3-4. 活動内容と工夫

なの花食堂では、単に食事を提供するだけでなく、「一緒につくる」ことを重視した活動が行われている。たこ焼きやお好み焼き、おにぎり作りなど、調理体験を通じて自然な交流が生まれるよう工夫されており、参加者同士が役割を分担しながら関わるのが特徴である。

この調理体験は、こどもにとっての学びの機会であると同時に、事業所利用者(成人)にとっても重要な生活経験の場となっており、法人の日常的な支援実践とも密接につながっている。また、高齢者が調理方法を教えたり、赤ちゃんを皆で抱っこしたりするなど、世代間交流が自然に生まれている点も、なの花食堂の特徴である。

運営者は、食堂が「食事以上の意味を持つ場」になっていることを強く実感している。特に、いっぱいいっぱいになっている保護者が、食事を受け取るだけでも助かると涙を流す場面があり、心理的な支えとしての役割を果たしていることがうかがえる。

4-3-5. 助成・支援体制

なの花食堂は、現時点では市の補助金や外部助成金を利用しておらず、法人への寄付などを原資として運営されている。食材については、つながりフードサポートセンターなどのフードバンクを利用するほか、スタッフ関係者の農家からの提供によって賄われている。不足分については法人負担で購入しており、限られた資源の中で工夫した運営が行われている。

ただし、食材分配のタイミングと開催日が合わない場合も多く、安定的な調達体制の構築は今後の課題の一つとされている。外部助成の活用については、今後の運営状況を踏まえながら検討される余地があると考えられる。

4-3-6. 課題と今後の展望

なの花食堂が直面している大きな課題として、立地条件による認知度の低さと、「作業所」というイメージに起因する参加の心理的ハードルが挙げられる。運営者は、特定の困窮層に限定せず、「来たい人は誰でも来ていい」というスタンスを意識的に採用しているが、その意図が十分に地域へ伝わっていない可能性も示唆されている。

一方で、こども食堂ネットワークの勉強会への参加や、他食堂の見学、福祉関係機関への活動周知など、外部との連携は徐々に進められている。地域とのつながりは、「ありがとう」「来られてうれしい」といった言葉を直接受け取った瞬間に実感されており、小さな手応えが積み重なっている段階にある。

今後は、継続的な広報と信頼形成を通じて、地域における「困ったときに思い出してもらえる場所」としての認知を上げていくことが重要であると考えられる。なの花食堂は、こども食堂を包括的な居場所づくりの一環として位置づける実践例として、今後の展開が注目される事例である。

4-4. ほっとスペースとんだばやし

4-4-1. こども食堂の概要と運営実態

ほっとスペースとんだばやしは、富田林市人権協議会が事務局を担い、2016年頃から継続的に活動しているこども食堂である。富田林市内において最初期に設立されたこども食堂の一つであり、長期にわたる継続的な運営実績を有している点が大きな特徴である。

現在は、原則として月4回、木曜日開催で運営されている。第5木曜日がある月には、夜間に運営委員会の会議が行われ、活動の振り返りや運営方針の確認がなされている。開催曜日について明確な理由は残されていないものの、結果として約10年にわたり同一曜日での開催が継続されており、地域に定着した活動となっている。

利用者(こども)は登録制で、登録者数は約45名、直近では1回あたりの平均参加人数が35～36名と、比較的安定した参加状況が続いている。2024年12月頃から参加者数が増加傾向にあり、潜在的なニーズの大きさがうかがえる。一方で、会場が手狭であることから、積極的な募集やチラシ配布は行っておらず、参加規模は運営上のキャパシティを考慮しながら調整されている。

4-4-2. ボランティア体制とその特徴

ほっとスペースとんだばやしでは、学習支援ボランティアと調理・片付け・遊びや交流ボランティアの二つの役割に分かれた体制が構築されている。学習支援は、こども食堂開始前の1時間(17時～18時)に実施され、その後、こどもと片付け以外のボランティアが共に食事をとる流れである。

学習支援ボランティアは登録者が15～16名程度で、1回あたりの参加人数は約10名である。調理・片付け等のボランティアについても、登録者数・参加人数はほぼ同規模で推移している。年齢層は学生から70代までと幅広く、特に調理ボランティアでは60代以上の参加者が多い点が特徴である。

また、過去に利用者であったこどもが中学生になり、配膳などの形でボランティアとして関わる事例も見られる。これは、こども食堂が単なる支援の場にとどまらず、地域の中で役割を引き継いでいく循環型の居場所として機能していることを示している。

4-4-3. 活動開始の経緯と理念

ほっとスペースとんだばやしは、地域における経済的困難や家庭環境の厳しさを背景に、「安心して過ごせる居場所」と「食事の支援」を目的として立ち上げられた。運営者によれば、この地域には一人親家庭や経済的に厳しい家庭が多く、こどもが家庭内で十分な居場所や時間を確保できない状況が以前から存在していたという。

こうした状況は、活動開始から現在に至るまで大きく改善しているとは言えず、こども食堂の役割は依然として重要であると認識されている。「直接的に家庭へ介入することはできないが、こどもが安心して過ごせる時間と場所を確保すること」が、本活動の根幹的な理念となっている。

4-4-4. 活動内容と工夫

ほっとスペースとんだばやしでは、学習支援・食事提供・自由遊びを組み合わせた「居場所型」の運営が行われている。学習支援の後、こどもと片付け以外のボランティアが共に食事をとり、その後 30 分程度、自由に遊ぶ時間が設けられている。

自由遊びの時間には、輪投げ、カードゲーム、卓球、絵本などが用意され、こどもと大人が自然な形で関われるよう工夫されている。また、田植えや稲刈り体験といった体験型の活動も実施されており、日常とは異なる経験を通じた関係づくりも重視している。

運営者は、兄弟姉妹が多く家庭内で自分の時間を持ちにくいこどもや、外国にルーツを持つこどもが、こども食堂を通じて安心できる居場所を見出している事例を挙げており、活動がこどもたちの心理的安定に寄与していることを実感している。

4-4-5. 助成・支援体制

運営資金については、富田林市の補助金を主な財源としている。その他の外部助成金は現時点では活用していない。食材は、週 1 回の買い出しを基本としつつ、大阪府からの提供食材、つながりフードサポートセンター、近隣農家等からの寄付など、多様なルートを組み合わせて調達している。

近年の物価高騰の影響により、市の補助金だけでは運営が厳しくなっており、食材寄付を活用しながら何とか活動を継続している状況にある。この点は、長期継続型のこども食堂が直面する共通課題の一つといえる。

4-4-6. 課題と今後の展望

運営上の最大の課題として挙げられたのは、人手不足と事務局への負担集中である。特に、調理ボランティアの高齢化が進んでおり、現在の週1回(実質月4回)開催を継続することが難しくなりつつある。このため、今後は隔週開催への変更も視野に入れて検討が進められている。

また、運営委員会方式は多様な関係者が関与できるという強みを持つ一方で、日常的な実務は事務局に集中しており、継続性の確保が課題となっている。運営者は「活動をやめるつもりはない」としつつも、現在の形をそのまま維持できるかどうかについては慎重な検討が必要であると述べている。

今後の展望としては、防災訓練など地域と連動した取り組みを継続するとともに、将来的には、複数のこども食堂が役割分担を行うような地域全体での連携の可能性も示唆された。ほっとスペースとんだばやしは、長期継続型こども食堂の先行事例として、今後のあり方を考える上で重要な示唆を与える事例である。

4-5. おかえり食堂

4-5-1. こども食堂の概要と運営実態

おかえり食堂は、新堂小学校区において活動するこども食堂であり、2024年4月に活動を開始した。開催頻度は月1回で、主に土曜日または日曜日に実施されており、開始当初から現在まで頻度の変更はない。活動拠点は天理教の教会施設であり、宗教活動そのものではなく、地域住民に開かれた共食の場として運営されている。

利用者は登録制を取らず、「誰でも参加できる」形式を採用している。1回あたりの参加者数はおおよそ30名程度で、その内訳はこども約20名、大人約10名である。参加する大人は60代から70代の高齢者が多く、特に一人暮らしの高齢女性の参加が目立つ。開始当初から20名程度の参加があり、現在に至るまで参加者数に大きな増減はなく、運営者自身も「無理なく継続できる、ちょうどよい規模」と認識している。

広報については、大規模な周知活動は行っておらず、自宅前の掲示板、個人のInstagram、口コミを中心とした方法にとどめている。この点も、規模を過度に拡大しないという運営方針と整合している。

4-5-2. ボランティア体制とその特徴

おかえり食堂の運営体制は、登録制ボランティアを置かず、家族・友人を中心とした少人数体制で構成されている。実質的な運営メンバーは5名であり、運営担当者である芝氏を中心に、配偶

者、母親、栄養士資格を持つ幼なじみ、その母親という、互いに顔の見える関係性の中で運営が行われている。

このような体制により、役割分担や意思決定が比較的スムーズに行われており、外部ボランティアの調整やマネジメントに伴う負担が生じにくい点が特徴である。一方で、運営規模の拡大には限界があるものの、現時点では「無理のない継続」を優先した体制として機能している。

4-5-3. 活動開始の経緯と理念

こども食堂を開始する直接的な契機となったのは、2024年元旦に発生した能登半島地震であった。芝氏は、被災地で支援活動に取り組む人々の姿や、天理教内での災害支援の動きを見聞きする中で、「自分にも何かできることはないか」と考えるようになったという。

被災地に直接赴いて支援活動を行うことは難しい状況の中で、身近な地域において、こどもや一人暮らしの高齢者が一緒に食事をする場をつくることで、少しでも人々が元気になれるのではないかと考え、おかえり食堂を立ち上げるに至った。理念としては、特定の課題解決を前面に出すのではなく、「みんなで一緒にご飯を食べて、明るい気持ちになってもらう」ことを重視している点に特徴がある。

4-5-4. 活動内容と工夫

活動内容は非常にシンプルで、食事の提供と自由な交流を中心に構成されている。開催時間は12時から14時までの約2時間で、参加者は食事をした後、時間の許す限り自由に過ごす形式となっている。特別なイベントやゲームは用意されておらず、自然なおしゃべりや世代間の会話が交流の中心となっている。

提供する食事は、毎回カレーに統一されている。これは、材料費を抑えやすく、調理工程が比較的簡単であり、長期的な継続に適しているという実務的判断によるものである。「カレー食堂」としてメニューを固定することで、準備や運営の負担を軽減し、活動の安定的な継続を可能にしている。

4-5-5. 助成・支援体制

運営にあたっては、市の補助金や民間助成金は一切利用していない。その理由として、申請書類の作成や手続きに伴う負担が大きいこと、また天理教教会を母体とする活動であることから、教会活動とのバランスを考慮している点が挙げられている。

食材については、自費購入を基本としつつ、備蓄米の提供や、近隣住民、勤務先関係者からの野菜の寄付などを組み合わせて調達している。外部助成に依存しない自主運営の形を取ることで、運営の自由度を確保し、規模や内容を自ら調整できる体制が維持されている。

4-5-6. 課題と今後の展望

現時点において、運営者は大きな課題を強く認識しているわけではない。参加者数や運営負担の面でも、現在の月 1 回・30 名程度という規模は、無理なく続けられる範囲であると捉えられている。

今後についても、積極的な規模拡大や新たなイベントの実施といった計画はなく、「これまで参加したことのない人にも、来てもらえる機会があればよい」という姿勢で、緩やかな継続をめざしている。会場のキャパシティを考慮すると、最大でも 40 名程度が上限であり、それ以上の拡大は想定していない。

本事例は、助成金や大規模な組織体制に依存せず、個人の問題意識と地域とのつながりを基盤として成立している、小規模・持続型のこども食堂の一形態として位置づけることができる。

4-6. おおとも食堂

4-6-1. こども食堂の概要と運営実態

おおとも食堂は、富田林市立第三中学校区を中心に活動するこども食堂であり、代表者は木本直子氏である。現在は月 1 回の頻度で開催されており、2024 年度は主に第 3 水曜日に実施されていた。会場は、下校後のこどもたちが集うことのできる地域コミュニティセンター「かがりの郷」で実施しているが、センターのこども向け事業である「キッズパラダイス」を活用する場合もある。「かがりの郷」は社会福祉協議会が指定管理を行っており、地域福祉との接点を持つ拠点として機能している。

2024 年度は大伴小学校で曜日をいろいろ替えて試験的に開催し、2025 年度以降は、試験的に実施した土曜日開催が好評であったことから、第 2 または第 3 土曜日への開催日変更が検討され、かがりの郷にて開催している。また、夏休みなど長期休暇中には、こどもが集まりやすい平日開催に切り替える可能性も示されており、柔軟な運営が志向されている。

参加者数については登録制を採用しておらず、回によって変動が大きい。こどもの参加人数は少ない場合で約 25 名、多い場合には最大 73 名に達したこともある。大人の参加者も比較的多く、22 名から 55 名程度が参加しており、世代を超えた交流が生じる場となっている。特に、夏休み期間やクリスマス会などのイベント時には参加者が増加する傾向が確認されている。

4-6-2. ボランティア体制とその特徴

おおとも食堂では、ボランティアは登録制を採用しており、現在 25 名が登録している。実際の活動に参加する人数は、1 回あたり 8 名程度が中心であり、多い場合には 13 名ほどが関与してい

る。ボランティアは地域住民を中心に構成されており、安定した運営を支える重要な人的資源となっている。

運営上の特徴として、毎回の活動終了後にボランティアによる振り返りの時間を設けている点が挙げられる。そこでは、当日の活動で良かった点や課題点が共有され、次回以降の改善につなげる話し合いが行われている。このような継続的な内省と改善のプロセスは、ボランティア同士の情報共有や関係性の強化にも寄与している。

また、当初は「大人がこどもに提供する場」として想定されていたが、実際の運営においては、こども自身が主体的に関わる場へと変化している。受付や配膳の手伝い、メニュー表の作成などをこどもたちが自発的に担うようになっており、ボランティアはそれを見守り、支援する役割を果たしている。この点は、おおとも食堂における参加型・協働型の運営の特徴を示している。

4-6-3. 活動開始の経緯と理念

おおとも食堂の立ち上げの背景には、当該校区においてこども食堂が存在していなかったという地域的課題がある。木本氏が小学校のPTAを務めていた当時、校長から声をかけられたことが直接のきっかけとなり、こども食堂の立ち上げが検討されることとなった。

当初、地域全体で運営する構想を想定していたものの、実際には木本氏個人に中心的役割が期待される形でスタートした。しかし、その過程で知人や元幼稚園園長、元教員、大学生など、多様な背景を持つ人々が自然に集まり、結果として現在の安定した運営体制が形成された。

活動理念として一貫して語られているのは、「地域に居場所をつくりたい」という思いである。特に、高齢化が進む地域において、こどもと高齢者が世代を超えて関われる“サードプレイス”の創出をめざしている点が特徴的である。開催場所を小学校から「かがりの郷」に移行したことで、高齢者の参加が増加し、認知症予防カフェの利用者がそのままこども食堂に参加するなど、世代間交流がより日常的に生まれるようになった。このような取り組みについて、運営者自身は、開始から1年という短期間ではあるものの、当初の目的は概ね達成されていると評価している。

4-6-4. 活動内容と工夫

おおとも食堂では、食事の提供を中心に据えつつ、参加者同士の自然な交流が生まれるような活動設計が行われている。食事を共にすること自体を交流の核とし、特別なプログラムを適度に設けながら、塗り絵や簡単な遊びなど、誰でも参加しやすい活動を通じて会話が生まれるよう工夫されている。

運営上の大きな工夫として、活動終了後のボランティアによる振り返りに加え、こどもたちの主体性を尊重する姿勢が挙げられる。受付や配膳、メニュー表の作成などをこどもが担うことで、「参加者」であると同時に「運営の一部」を担う経験が生まれている。これにより、こどもが役割を持って

場に関わることが可能となり、自己肯定感の向上や責任感の育成にもつながっていると考えられる。

4-6-5. 助成・支援体制

おおとも食堂の運営は、複数の助成金および物的支援によって支えられている。主な財政的支援としては、富田林市の助成金を継続的に受けているほか、「トマトちゃん基金(大阪いずみ市民生協)」の助成を2024年度に受給している。これらの助成金は、市の助成金と重複しない形で、交通費やボランティア用備品、外部講師への謝金などに活用されている。

食材調達については、大阪府からの定期配送、フードバンク(つながりフードサポートセンター)、地域農家からの提供、市の助成金を組み合わせることで対応しており、参加者数が多い場合でも安定した食事提供が可能となっている。このような多元的な支援体制は、運営の持続可能性を高める重要な要素である。

4-6-6. 課題と今後の展望

現在認識されている主な課題としては、ボランティアの高齢化が挙げられる。ただし、近年は新たな参加者も増加しており、現時点では深刻な問題には至っていないと認識されている。今後は、世代交代を意識しつつ、無理のない形で運営を継続していくことが求められる。

今後の展望としては、これまでの食事提供と交流の場づくりに加え、食育や防災をテーマとした取り組みを継続・発展させていく方針が示されている。具体的には、防災食の体験、盲導犬ユーザーによる講話、畑活動などが計画されており、こども食堂を拠点とした学びや地域課題への気づきを促す活動へと広がりつつある。

これらの点から、おおとも食堂は単なる食事提供の場にとどまらず、地域における世代間交流と学びの拠点として機能している事例であると位置づけられる。

第5章 おわりに

本調査では、大阪府富田林地域における子ども食堂の実態を明らかにすることを目的として、利用者アンケート、ボランティアアンケート、高学年児童を対象としたイメージ調査、そして運営者へのインタビュー調査を実施してきた。本章では、これまでの調査結果を総合的に振り返り、子ども食堂が地域において果たしている役割と、今後に向けた課題と展望について整理する。

①子ども食堂は、子どもにとっての「食事の場」を超えた日常的な居場所となっている

利用者アンケートの結果からは、子ども食堂が単なる「食事を提供する場所」ではなく、子どもたちにとっての日常的な居場所として機能している実態が明らかとなった。友達と遊べること、誰かと一緒に食事ができること、地域の大人と自然に関わることなど、子どもたちは子ども食堂の中に複数の価値を見出している。

②子ども食堂の利用は、子どもの人間関係の広がりにつながっている

特に、「友達が増えた」「地域の大人を知るようになった」といった変化を実感している回答が多く、子ども食堂への参加が人間関係の広がりにつながっていることが示された。一方で、「特に変わらない」と感じる子どもも一定数存在しており、子ども食堂の効果や意味の受け止め方には個人差があることも確認された。

③子ども食堂は、ボランティアの高いやりがいと満足感によって支えられている

ボランティアアンケートからは、子ども食堂が高いボランティアのやりがいと満足感によって支えられている現状が浮かび上がった。多くのボランティアが「子どもの笑顔」や「地域とのつながり」にやりがいを感じており、活動そのものが肯定的な経験となっていることがうかがえる。

④善意に支えられた運営の裏側に、人的・時間的な制約という課題が存在する

しかし同時に、「ボランティアの人手不足」や「子どもと十分に関わる時間が取れない」といった課題も指摘されており、活動が善意や献身に大きく依存している現状が明らかとなった。これは、子ども食堂を持続可能な活動としていく上で避けて通れない課題である。

⑤子ども食堂は肯定的に認知されつつも、実態が十分に伝わっていない

また、高学年児童を対象としたイメージ調査では、子ども食堂に対して「楽しそう」「おいしいものが食べられそう」といった肯定的な印象が広がっている一方で、「知らない人と話さないといけなさそう」「何をやる場所かわからない」といった不安や戸惑いも存在していることが示された。この結果は、子ども食堂がすでに一定の認知を得ている一方で、その実際の姿や雰囲気十分に伝わっていない可能性を示唆している。

⑥利用経験のないこどもにとって、心理的ハードルの低減が重要な課題である

利用していないこどもたちにとっての心理的ハードルを下げるためには、活動内容や雰囲気をつまみやすく伝える工夫が今後ますます重要になると考えられる。

⑦こども食堂は、運営者の理念と地域の実情に応じて多様な形で展開されている

運営者へのインタビュー調査からは、こども食堂がそれぞれ異なる背景や理念のもとで立ち上げられ、地域の実情に応じた形で運営されていることが明らかとなった。

⑧「誰でも来られる居場所」をめざす理念と、継続への不安が共存している

運営者は共通して、「特別な支援の場ではなく、誰でも来られる場所でありたい」「こどもが安心して過ごせる居場所をつくりたい」という思いを持って活動を続けている。一方で、資金面の不安、担い手の固定化、将来的な継続への懸念など、長期的な運営に関する悩みも浮き彫りになった。

⑨こども食堂は、地域における「関係性の拠点」として機能している

以上の調査結果を総合すると、こども食堂は、こども・保護者・地域住民・ボランティアといった多様な人々が交わることで成り立つ、地域に根ざした「関係性の拠点」であるといえる。その価値は、食事の提供という目に見える支援だけでなく、人と人がゆるやかにつながる場を生み出している点にある。

⑩こども食堂の継続には、地域的・制度的な支援との接続が不可欠である

しかし同時に、その運営は不安定さを内包しており、継続のためには周囲からの理解や支援、制度との接続が不可欠である。

本報告書が、こども食堂に関心を持つ地域住民、支援者、行政関係者にとって、現場の実態を理解するための一助となり、今後のこども食堂のあり方を考えるための基礎資料となることを期待したい。そして、こども食堂が今後も地域の中で「無理なく」「自然に」続いていくために、どのような支え方が可能なのかを、地域全体で考えていく契機となることを、本調査の結びとしたい。

最後に、この調査にご協力をいただきました各こども食堂の利用者、ボランティア、運営者の皆様、新堂小学校、大伴小学校の先生、児童・生徒の皆様にご挨拶申し上げます。

(付録) アンケート調査の自由回答の抜粋

本節では、アンケート調査において設定した質問項目のうち、自由記述形式で得られた回答について、その一部を抜粋して紹介する。

ボランティア向けアンケート

Q13 どんな時に、こども食堂は地域とつながっていると感じますか？

来られた人が家族の誰かと知り合いとわかった時。
地域の他団体の活動を知り、情報共有できたとき
地域の方から野菜が届いたり、リピーターの方がおられたり、こども食堂じゃないときに声をかけられるようになったりして
子ども食堂開催時に、高齢の利用者さんと子ども達、学校の先生方が声をかけあっている姿を見た時。
子供だけでなく様々な方が来られてその様子から良い居場所になっているのだなと感じるから
こども食堂内で学区を超えて友達ができたとき
地域の人たちや子どもがたくさん参加しているのをみた時
調理ボランティアの募集をしたときに応じてくれる住民がいたこと。
子どもたちが私の事を覚えてあいさつ等をしてくれる
見守り隊の方々が参加してくださったりすること
地域の方々からの食品提供や、人から人へと口コミが伝わっていると思えた！
大人も子供もみんな普通に名前（しかも愛称）で呼びあっていること
市長や市議会議員さん、小学校の校長先生や先生たち、見守りたいの方々が、来てくださる。そして、お野菜やお米など寄付をしてくださるご近所の方々がいること。
来てくれた方がまた地域の方をお誘いして食堂に来てくれた時
街の行事があったときなど、こどもが声をかけてくれたり、挨拶されたりと増えたような気がします
地域の小学生だけでなく、高齢者の憩いの場にもなっていると思うから
老若男女、幼児からお年寄りまで集まってきているので、小さなコミュニティができている。今後の広がり期待大です。

Q16.あなたのボランティア先のこども食堂について、どのように改善できると思いますか？

もっと子ども達に関われる場面をつくって
子どものやる気UP → たくさんの大人から褒められて嬉しい → 自己肯定感も高まる
あたたかい眼差しで見守りながら、自分で考えて行動できる子ども達の健やかな育ちを応援したい
子供と直接関わっているボランティアの意識改革
こども食堂運営委員会に、関わっているボランティアに参加をしてもらえればどうか
みんながしっかり勉強するところを多くして欲しい
広い地域からの参加が増えてほしいので広報していく事でより意味があるようになると思う
こども食堂としての場所だけでなく、何か困ったこと、相談したいことがあるときに気軽に話に来れるような場所になればいいなと思います
地域にとらわれず広く開くこと。ボランティア一人ひとりが支援者として子どもたちと接する。お客様をしない。
長くつづけていく事で、地域の沢山の方に周知してもらえるようになり、参加者が増え、誰もが行きやすい場になっていくと考える。
若い世代のボランティアが増えてほしいと思う
今後の開催日時要検討
子どもがこども食堂のお客さんにならないように

利用者向けアンケート

Q14.あなたにとって、今行っているこども食堂が、どんなこども食堂になったら良いと思いますか？

いつも通り続けて欲しい
いっしょにご飯が食べられる
子どもたちがもっといたらいいな。
冬休みに宿題してごはんも食べれる
学校でできないことをしたい
イベントなどもっとしたいです
みんななかよくいっしょにいれるところ
今で満足しています
いっぱい食べれるこども食堂
もっとおもちゃ（人形）があればいい

高学年児童を対象とした「こども食堂のイメージ」に関するアンケート

Q13.放課後や週末を過ごすために、どんな場所があったら良いなと思いますか？

ゆっくりできる場所
いつでも行ける場所
みんなでゲームを対戦したり遊ぶところ
大人数でも遊べる場所。
勉強スペース
漫画や本があったりボールを使った遊びができる場所
子供達が自由に遊べる場所
図書館や本屋さんが遠いので近くにできて欲しい
時間を気にせず遊べる場所

